

# 名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.263

2015年4月

松尾新総長就任あいさつ — 総長就任にあたって —



## 目次

●松尾新総長就任あいさつ	
総長就任にあたって	3
●ニュース	
平成26年度卒業式を挙	5
濱口総長がベトナム・カンボジアからメダル、勲章を授与	14
国際シンポジウム「臨床研究における正義」を開催	15
第3回「水田賞」授賞式を挙	16
名古屋大学協会の10周年記念次世代ロボット講演会を開催	16
「PhD プロフェッショナル登龍門」シンポジウムを開催	17
名古屋大学「東海東京フィナンシャル・ホールディングス・グローバル事業」に調印	17
名古屋大学基金感謝の集いを開催	18
卒業・修了留学生を送る夕べを開催	18
第48回経営協議会を開催	19
平成26年度退職者表彰式及び退職職員懇談会を開催	19
天野 浩工学研究科教授へ名古屋大学特別教授の称号を授与	20
濱口総長退任式を挙	20
●知の未来へ	
特許クレーム解釈論 ― 特許権の成り立ち・有効性判断と技術的範囲画定の前	21
前提を探る	
西井 志織（大学院法学研究科准教授）	
●知の先端	
火山で発生する地震と噴火の予測	22
熊谷 博之（大学院環境学研究科教授）	
●学生の元気	
平成26年度名古屋大学総長顕彰 8名1団体を表彰	24
平成26年度名古屋大学総長顕彰 受賞者及び受賞団体のことば	26
●部局ニュース	
文学研究科公開シンポジウムを開催	29
第13回坂田・早川記念レクチャーを開催	29
公開講演会を開催	30
第2回エネルギーシステムシンポジウムを開催	30
大学教育改革フォーラム in 東海2015を開催	31
第4回地球教室を開催	31
第60回博物館コンサートを開催	32
坂田記念 KMI ワークショップを開催	32
●資 料	
平成27年度名古屋大学組織図	33
●新任役員等の紹介	34
●受賞者一覧	36
●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成27年2月16日～3月15日	40
●イベントカレンダー	42
●ちょっと名大史	
名古屋大学と空襲② ― 大幸キャンパス ―	44

# 総長就任にあたって

## 第14代名古屋大学総長

## 松尾 清一



本年4月1日をもちまして、名古屋大学総長に就任いたしました松尾清一です。

名古屋大学は、1871(明治4)年に仮病院・仮医学校が設立されて以来144年の歴史をもつ伝統ある大学です。1939(昭和14)年に我が国で最後の帝国大学となり、学制改革によって1949(昭和24)年に新制名古屋大学として生まれ変わり、その後着実な発展を遂げながら今日に至っています。名古屋大学は創立当初から受け継がれている「自由闊達」な学風を伝統とし、2000年に制定された名古屋大学学術憲章に掲げられている2つの基本目標、「創造的な研究活動によって真理を探究し、世界屈指の知的成果を産み出す」、「自発性を重視する教育実践によって、論理的思考力と想像力に富んだ勇氣ある知識人を育てる」を高く掲げて、その実現のため日々努力を重ねてきました。21世紀に入ってからノーベル賞を受賞した日本人13名のうち6名が本学関係者であることは、名古屋大学の研究力が世界的に高いことを如実に示しています。また、名古屋大学はその長い歴史の中で、社会の様々な分野でリーダーとなる多くの人材を世に送り出し、日本及び世界の発展に貢献してきました。名古屋大学は社会への貢献を大きな目標として掲げ、「時代とともに変化する社会のニーズにマッチした人材」、「社会の様々な分野でリーダーとして活躍できる人材」の育成を目指して教職員が日々工夫を凝らして活動に励んでいます。私たち名古屋大

学は、激動・激変する世界であって高い見識と確かな知識や技術でたくましくリーダーシップをとれる人材を育てよう、と考えています。

近年、名古屋大学は研究力や教育力の一層の強化とともに、全学を挙げて国際化、男女共同参画、社会貢献に取り組んでいます。名古屋大学における国際化の視点は3つあります。第一は、欧米重視の一極的な視点から多極的な視点への転換です。中でも日本が位置するアジア地域は、今後世界をけん引する巨大なポテンシャルを持っており、アジアとの連携・共生なしには日本の未来はありません。名古屋大学はすでに多くのプロジェクトを、アジアを含む世界各地に展開しており、年々国際共同が進んでいます。第二は双方向的な人材交流の活発化です。現在、海外から受け入れている留学生総数は約2,200名(全学生数約16,000名の約14%)になっています。一方で、名古屋大学在学中に長期短期を問わず、海外での経験をした学生比率も年々増加しています。このように、世界から名古屋大学へ、名古屋大学から世界へ、という双方向の人材交流を積極的に行うことによって国際的な視点を持った人材とそのネットワークを作っています。第三は、国際化を支える英語教育の強化です。名古屋大学では様々な語学プログラムにより日本人の学生を支援するとともに、1,140もの講義コースが英語で行われており、英語のみで修了できるカリキュラムも増

加しています。名古屋大学のキャンパスには世界各地から人材が集い、学生や研究者が日々交流できる環境が整っています。

名古屋大学はまた、男女共同参画にも積極的に取り組んでいます。保育所の整備にとどまらず学童保育の導入も全国の国立大学に先駆けて行いました。また女性研究者の採用枠の拡大や支援も行っており、全国から優秀な女性研究者が集まるようになっていきます。国際交流事業にも女性が積極的に参画しており、社会から高い評価を受けています。女性の活躍は日本の未来を支える大きな力となるでしょう。

一方で、名古屋大学はものづくり産業の集積が最も進んだ地域にある中核大学として、社会から極めて大きな期待を集めています。地域への貢献と国際化は決して矛盾した概念ではなく、むしろ両者は相乗的に効果を発揮できる関係にあると考えています。国、地方自治体、産業界、大学、市民と密に連携して、未来に向かって活力ある地域を創造し、世界との交流を推進するために、名古屋大学は様々な連携事業を展開しています。

名古屋大学は未来志向の大学です。私たちの未来には多くの困難が立ちほだかっていますが、構成員が社会の様々な人々と連携しながら、明るく希望に満ちた日本と世界をつくるために、勇氣をもって前に進み、貢献できることを心から願っています。

松尾清一

平成27年4月

## 総長プロフィール

氏名 <sup>まつお</sup>松尾 <sup>せいいち</sup>清一  
(昭和25年12月20日生)

学位 医学博士 (名古屋大学)

略歴 昭和51年3月 名古屋大学医学部卒業  
同56年7月 医学博士 (名古屋大学)  
同56年9月 米国マウントサイナイメディカルセンター研究員  
同57年8月 米国ニューヨーク州立大学研究員  
同59年10月 労働福祉事業団中部労災病院内科医師  
同61年5月 名古屋大学医学部助手  
同61年7月 名古屋大学医学部附属病院助手  
平成9年2月 名古屋大学医学部附属病院講師  
同14年1月 名古屋大学大学院医学研究科教授  
同14年1月 名古屋大学医学部附属病院第三内科長  
同14年4月 名古屋大学大学院医学系研究科教授  
同14年6月 名古屋大学医学部附属病院腎臓内科長  
同14年6月 名古屋大学医学部附属病院卒後臨床研修センター部長  
同16年4月 名古屋大学医学部附属病院副病院長  
同16年4月 名古屋大学大幸医療センター長  
同19年4月 名古屋大学医学部附属病院長  
同20年6月 名古屋大学医学部附属病院遺伝子・再生医療センター長  
同21年4月 名古屋大学副総長  
同22年4月 名古屋大学予防早期医療創成センター長  
同24年4月 名古屋大学産学官連携推進本部長  
同24年4月 名古屋大学社会貢献人材育成本部長  
同26年1月 名古屋大学学術研究・産学官連携推進本部長  
同26年4月 名古屋大学未来社会創造機構長  
同27年4月 名古屋大学総長

専門分野 腎臓内科学

所属学会 日本内科学会、日本腎臓学会、米国腎臓学会 など

主な学会の役職 日本腎臓学会理事長

### 主な研究業績

- In vivo interaction of antibodies with cell surface antigens. A mechanism responsible for in situ formation of immune deposits in the zona pellucida of rabbit oocytes. Matsuo S, Caldwell PRB, Brentjens JR, Andres G. Journal of Clinical Investigation. 75: 1369-1380, 1985.
- Glomerulonephritis induced in the rabbit by antiendothelial antibodies. Matsuo S, Fukatsu A, Taub ML, Caldwell PRB, Brentjens JR, Andres G. Journal of Clinical Investigation. 79: 1798-1811, 1987.
- Experimental glomerulonephritis induced in rats by a lectin and its antibodies. Matsuo S, Yoshida F, Yuzawa Y, Hara S, Fukatsu A, Watanabe Y, Sakamoto N. Kidney International. 36: 1011-1021, 1989.
- The role of CD59 in the complement-mediated glomerular injury in rats. Matsuo S, Nishikage H, Nomura A, Yoshida F, Piddlesden SJ, Morgan BP. Kidney International. 46: 191-200, 1994.
- In vivo effects of monoclonal antibodies which functionally inhibit complement regulatory proteins in rats. Matsuo S, Ichida S, Takizawa H, Okada N, Baranyi L, Iguchi A, Morgan BP, Okada H. Journal of Experimental Medicine. 180: 1619-1627, 1994.
- Tubulointerstitial injury induced in rats by a monoclonal antibody which inhibits function of a membrane inhibitor of complement. Nomura A, Nishikawa K, Yuzawa Y, Okada H, Okada N, Morgan BP, Piddlesden SJ, Nadai M, Hasegawa T, Matsuo S. Journal of Clinical Investigation. 96: 2348-2356, 1995.
- Revised equations for estimating GFR from serum creatinine in Japan. Matsuo S, Imai E, Horio M, Yasuda Y, Tomita K, Nitta K, Yamagata K, Tomino Y, Yokoyama H, Hishida A. Am J Kidney Dis. 53: 982-993, 2009.

## 平成26年度卒業式を挙行



平成26年度名古屋大学卒業式が、3月25日(水)、豊田講堂において挙行されました。

午前9時30分から修士・専門職・博士学位記授与式が、続いて午前11時50分から学士学位記授与式が行われ、会場は卒業生で満員となりました。

名古屋大学交響楽団が演奏する「ニュルンベルクのマイスターズinger」前奏曲（ワグナー作曲）で式典が始まり、濱口総長から修士課程及び博士課程前期課程修了生1,614名に修士学位記が、大学院法学研究科専門職学位課程（法科大学院）修了生71名に専門職学位記が、医学博士課程及び博士課程後期課程修了生216名に博士学位記が、また、学部卒業生2,216名に学士学位記が、それぞれ授与されました。

総長は、修了生及び卒業生に対し、それぞれ送別のことばを贈り、激励しました（詳しくは、総長の辞をご覧ください）。

ださい）。

次に、修了生及び卒業生を代表して、大学院法学研究科博士課程前期課程修了生の加藤紫帆さんが修了生総代として、また、理学部卒業生の小島翔悟さんが学部卒業生総代として、本学への感謝の気持ちと今後の抱負等を述べました。

また、来賓として、名古屋大学全学同窓会会長の豊田章一郎氏（トヨタ自動車株式会社名誉会長）及び名古屋大学全学同窓会副会長の岡田邦彦氏（元J.フロント リテイリング株式会社代表取締役会長）より心のこもった祝辞をいただきました（詳しくは、来賓祝辞をご覧ください）。

最後に、名古屋大学混声合唱団が、送別の歌として学生歌「若き我等」、「青空が青かった」を合唱、続いて「蛍の光」を全員で斉唱しました。また、今年も昨年に続き、送別の歌の後、修

了生・卒業生を代表して博士及び学士の総代生から、列席されたご家族に花束の贈呈が行われました。式典は、名古屋大学交響楽団による「交響曲第1番第4楽章」（ブラームス作曲）の演奏とともに幕を閉じました。

卒業式終了後には、豊田講堂前に詰めかけた後輩たちから花束を贈られたり、胴上げをされたり、友人や後輩、保護者などと記念撮影をする卒業生の姿があちらこちらで見られました。

卒業式の様子は、豊田講堂ホワイエ及び中2階、シンポジオンホール、経済学部カンファレンスホール、また、本学ホームページ上においてライブ中継され、多くの方々がこの晴れがましい式典に臨みました。

なお、卒業式の模様は、現在、本学のホームページ（[http://www.nagoya-u.ac.jp/info/26\\_2.html](http://www.nagoya-u.ac.jp/info/26_2.html)）で視聴することができます。

# 平成26年度大学院修了式祝辞

名古屋大学総長 濱口 道成



名古屋大学は、本日ここに、平成26年度大学院修士課程及び博士課程前期課程修了者1,614名に修士学位記を、大学院専門職学位課程修了者71名に専門職学位記を、医学博士課程及び博士課程後期課程修了者216名に博士學位記を授与いたしました。学位記を授与された皆さんに教職員を代表して心からお祝いを申し上げます。

今日皆さんは、改めて、大学での生活を思い起こし、様々な出来事を振り返られている事と思います。どんなことが、心に残っていますか。学位をとるということの意味を、皆さんはどう考えておられますか。学位、特に博士学位は、皆さんが、一人前の研究者としての能力と実績を獲得したことを証明するものです。

今日は、学位を取られた皆さんと、改めて「勇気」について考えてみたいと思います。何故か。

皆さんは、名古屋大学学術憲章を知っていますか。名古屋大学学術憲章では、名古屋大学は、自由闊達な学風の下、人間と社会と自然に関する研究と教育を通じて、人々の幸福に貢献することを、その使命とする。また教育の基本目標として、名古屋大学は、自発性を重視する教育実践によって、論理的思考力と想像力に富んだ勇気ある知識人を育てる、とあります。

さて、皆さん。皆さんは、大学院の学生生活を通じて、勇気ある知識人として育ったと思いますか。いかがですか。大学で勉強すれば、知識はつきますが、勉強すれば「勇気」も付くのでしょうか。勇気の付く大学教育はあるのでしょうか。どう思われますか。この言葉は、名古屋大学学術憲章に書かれているわけですから、名大にとって最も大切な目標です。しかし、私は総長として、心の中で常に自問自答してきました。我々は「勇気ある知識人」を育てているか、教育を通じて「勇気」は育てることができるのか。そして、何のための勇気かと。

勇気ある知識人という言葉について、皆さんと話したいと思ったのは、最近残念なことが続いているからです。それは、論文のコピペ、そして論文データの改ざんです。STAP細胞の事件は、科学に対する信頼を大きく損ねました。いま、様々な分野でコピペやデータ改ざんが起きています。科学者にとって、論文はその仕事に費やした自分の時間、人生の象徴です。コピペは、科学者としての誇りと自尊を捨てるものです。ましてデータの改ざんは、多くの人々を欺く詐欺行為と言えます。このようなことが連続すると、科学、そして科学者全体への不信を生み出します。

残念なことではありますが、今の科学界で起きている事件を教訓に、科学者の尊厳と誇りについて、そしてたとえ不都合な事実と直面したとしても、その事実をまっすぐに受け止める勇気について、改めて考えて頂きたいと願っています。

勇気について、もう少し話します。最近、イノベーションという言葉をよく聞くと思います。大学改革でも、グローバル化とイノベーション、革新で社会的な意味を持つ価値の創出が大きな目標となっています。今大学は、イノベーションを実現する人材の育成を求められています。それは可能でしょうか。皆さんはどう思われますか。自分はスティーブ・ジョブズになれると思いますか。どうですか？

ハーバード大学教授のクリステンセンは、スティーブ・ジョブズを含む、革新的な製品・サービスを開発した100名近いイノベーターにインタビューし、こんな結論を述べています。イノベーターには2つの共通要素があると。第一に、「スマートリスクを取る勇気」、そして第二に、「イノベーターとなる5つのスキル、関連付ける力、質問力、観察力、ネットワーク力、そして実験力の5つのスキル」を挙げています。「スマートリスクを取る勇気」、いい言葉ですね。この言葉は、名古屋大学学術憲章の「自発性を重



視する教育実践によって、論理的思考力と想像力に富んだ  
勇気ある知識人を育てる。」と通い合う意味を持っている  
と思います。

勇気について、もう1つ、今日は改めて、皆さんに赤崎  
先生の事を話したいと思います。名古屋大学では、2001年  
に野依先生がノーベル化学賞を受賞されました。私が総長  
に就任することが決まった年、2008年には、益川先生と  
小林先生が物理学賞、下村先生が化学賞を受賞されまし  
た。そして昨年、赤崎先生と天野先生が物理学賞を受賞さ  
れました。今、名古屋大学は、日本ではありません、アジ  
アで最もノーベル賞の受賞者が多い大学です。君たちは、  
本当に素晴らしい大学で勉強する機会を得たのですよ。

さて、赤崎先生が、ご自分の研究を振り返り、「一人荒  
野に行くがごとく」であったとおっしゃられています。何  
故か。先生の研究された窒化ガリウムによる青色LEDは、  
当時20世紀中には実現不可能であるとされていました。長  
く厳しい挑戦を越えて、赤崎先生、天野先生は青色LED  
を実現しました。もしこの発明がなければ、スマートフォン  
やパソコンは今のようを実現していなかったでしょう。  
テレビもブラウン管のままだったでしょう。更に重要なこ  
とは、この発明が、エネルギー消費全体に大きな影響を与  
えた事です。青色LEDにより白色LEDが開発され、従  
来の電球に比して、10倍の寿命と6倍の効率を持つLED  
電球が実現されました。LEDの普及により2020年には、  
日本の電気総需要の7%を削減でき、その効果は原子力  
発電所10数基に相当します。また、LEDの発明はアフリ  
カや中央アジアなどの15億人の人々に光をもたらした発  
明とされています。まさに青色LEDは、21世紀の人間社会  
の在り方を根底から変える技術の1つ、エジソンの電球以  
来の発明となったと言えます。ノーベル賞記念講演で、研  
究を象徴する言葉として、赤崎先生は「不屈」、天野先生  
は「貢献」、中村先生は「挑戦」をあげています。「不屈」、

「貢献」、「挑戦」、覚えておいてください。

さて、我々人類はいま、従来の科学では解決困難な、多  
様なそして地球規模で起きる課題に直面しています。例え  
ば、エネルギー問題、環境汚染、地球温暖化、食料不足、  
どれをとっても簡単に解決が見つかるものではありません。  
しかし考え方を変えれば、今私達は、劇的な体験ので  
きる時代を生きているのかもしれませんが。言い換えれば、  
様々なやりがいと可能性に満ちた時代を生きているのかも  
しれません。そして、その可能性を現実にする力は、君達  
若者の中にあります。更に、君たちの力を生かす解決法  
は、科学技術の発展の中にあると私は思います。いま我々  
は、新しい発想と価値観を持った、困難を解決できる科学  
技術・イノベーションが必要なのです。皆さんは、どのよ  
うな現場で働くとも、我々の抱えている困難をまっすぐ  
に見据え、困難に挑戦し続ける人材、革新的な価値を創造  
する人材、「勇気ある知識人」となっていだきたい、これ  
が皆さんの卒業にあたり、私からの願いです。

それから、「不屈」、「貢献」、「挑戦」。この言葉を覚えて  
おいてください。そして、覚えておいてください。君たち  
の学んだ名古屋大学には、「不屈」、「貢献」という言葉を  
心に抱き、人類の直面する困難にまっすぐ挑んでこられた  
先生方がおられたことを。

勇気をもって一歩前へ。皆さんの可能性に挑戦してくだ  
さい。冷静に作業仮説を立て、スマートリスクを取る勇気  
を持てば、解決不能と思われる困難も、克服可能にできる  
道が見つかります。

皆さんの豊かな未来を祈念いたします。卒業おめでとう。

# 平成26年度学部卒業式祝辞

名古屋大学総長 濱口 道成



皆さん、ご卒業おめでとうございます。

名古屋大学は、本日ここに、平成26年度の学部卒業生2,216名に、学士の学位記を授与いたしました。

名古屋大学教職員を代表して、皆さんの卒業を、心からお祝いします。おめでとう。

早いものですね。皆さんを入学式で迎えてから、もう4年が経ちました。私も、皆さんと一緒に、総長という仕事を卒業します。皆さんと一緒に何年かの歳月を過ごすことができ、そしてまた皆さんの成長を実感できたことはとてもうれしく思っています。

さて、皆さんの名大での学生生活は、どんなことが心に残っていますか。入学式にあたって、私が皆さんにお願いしたことがあります。覚えていますか。1点目は、市内の方には、できれば下宿して、孤独を体験してくださいとお願いしました。孤独を味わうことは、自立への1歩です。下宿した人はどれくらいみえるでしょう。手を挙げてみて下さい。

2点目。海外体験をしてくださいとお願いしました。いかがでしたか。4年の間に海外に出かけた人、手を挙げてください。私は、6年間、毎年入学式で皆さんに、「下宿しなさい。海外へ留学しなさい」とお願いしてきました。その結果、6年間で海外へ出かける名大生は5倍となり、650名に達するようになりました。今、とてもうれしく思います。

何故、海外へ出かけなさいとお願いしたか、その理由は名古屋大学学術憲章にあります。皆さんは、名古屋大学学術憲章を知っていますか。名古屋大学学術憲章では、名古屋大学は、自由闊達な学風の下、人間と社会と自然に関する研究と教育を通じて、人々の幸福に貢献することを、その使命とする、とあります。また教育の基本目標として、名古屋大学は、自発性を重視する教育実践によって、論理

的思考力と想像力に富んだ勇気ある知識人を育てる、とあります。皆さん。皆さんは、4年間の学生生活を通じて、自由闊達な勇気ある知識人として育ったと思いますか。いかがですか。

大学で勉強すれば、知識はつきますが、勉強すれば「勇気」も付くのでしょうか。勇気の付く大学教育はあるのでしょうか。どう思われますか。この言葉は、名古屋大学学術憲章に書かれているわけですから、大学として最も大切な目標です。しかし、私は総長として、心の中でいつも自問自答してきました。我々は「勇気ある知識人」を育てているか、教育を通じて「勇気」は育てることができるのか。そして、何のための勇気かと。君はどう思いますか。

何故、こんなことを改めてみなさんに聞くのでしょうか。それは大学という時期が皆さんの成長にとって、とても大切な時期だからです。青春という多感な時期は、人間にとって自我を開放し、自らの中に眠る可能性に目覚め、多様な価値と文化を知り、志を高め、他者・社会との対話を深め、生きがいを求めて、自立していく時期です。デカルトに「われ思うゆえにわれあり」という言葉がありますが、私はこの言葉はあまり好きではありません。「意識は存在に規定される」、「存在とは行動である」との言葉の方が好きです。私はデカルトを誤解しているかもしれません。しかし、人間は、じっと考えていたら自分がわかるというものではなくて、実際の体験の中で、混沌とした現実と格闘しつつ、成長していく存在だと思います。しかしさりながら、君達、自宅から大学に通う名大生にとっては、大学生活は高校の延長にあり、「自我の解放」とは遠い環境になりがちであります。大学が、生涯忘れ得ない存在となり得るには、どれだけ君たちの心に響く深い体験があったかによるでしょう。ではどうしたら良いのか。その答えの1つが、海外での体験、多様な文化の中で、全く違う価値観とぶつかり格闘する事だと、私は思いました。残念な



がら、講義室で講義を受けているだけでは、勇気を学習することはできないと思います。勇気を如何に学ぶかについて、私の1つの結論は、皆さんに海外体験をしていただくことでした。私の体験でもありますが、海外で生活することは、多様な文化と価値観の中で、1つ1つの困難を越える体験をし、漠然と自分の中にある恐れを克服する作業でもあるからです。いかがでしたか。海外は。

勇気について、もう1つ、今日は改めて、皆さんに赤崎先生の事を話したいと思います。名古屋大学では、2001年に野依先生がノーベル化学賞を受賞されました。私が総長に就任することが決まった年、2008年には、益川先生と小林先生が物理学賞、下村先生が化学賞を受賞されました。そして昨年、赤崎先生と天野先生が物理学賞を受賞されました。今、名古屋大学は、日本ではありません、アジアで最もノーベル賞の受賞者が多い大学です。君たちは、本当に素晴らしい大学で勉強する機会を得たのですよ。

さて、赤崎先生が、ご自分の研究を振り返り、「一人荒野に行くがごとく」であったとおっしゃられています。何故か。先生の研究された窒化ガリウムによる青色LEDは、当時20世紀中には実現不可能であるとされていました。長く厳しい挑戦を越えて、赤崎先生、天野先生は青色LEDを実現しました。もしこの発明がなければ、スマートフォンやパソコンは今のように実現していなかったでしょう。テレビもブラウン管のままだったでしょう。更に重要なことは、この発明が、エネルギー消費全体に大きな影響を与えた事です。青色LEDにより白色LEDが開発され、従来の電球に比して、10倍の寿命と6倍の効率を持つLED電球が実現されました。LEDの普及により2020年には、日本の電気総需要の7%を削減でき、その効果は原子力発電所10数基に相当します。また、LEDの発明はアフリカや中央アジアなどの15億人の人々に光をもたらした発明とされています。まさに青色LEDは、21世紀の人間社会

の在り方を根底から変える技術の1つ、エジソンの電球以来の発明となったと言えます。ノーベル賞記念講演で、研究を象徴する言葉として、赤崎先生は「不屈」、天野先生は「貢献」、中村先生は「挑戦」をあげています。「不屈」、「貢献」、「挑戦」。覚えておいてください。

さて、皆さんが、今日の卒業式を迎えるまでの生活は、一見平凡なものに見えていても、実はかけがえのない生活であったと思います。

よく見てください。今日の青い空、春の息吹、どれ1つをとっても、かけがえのない時間です。そしてまた、明日からの1日1日も、雨の日も、風の日も、真夏の炎天も、同様にかげがえのない日々なのです。

これから皆さんは、自立した社会人として、生きていく時代を迎えます。皆さんの未来は、決して平坦なものではありません。しかし、困難を越えていくことは、勇気をもって、困難をやりがいと希望に変えることでもあります。これから皆さんが、多くの方と出会い、成長し続け、「勇気ある知識人」として、新しい時代を切り開いていただける事を祈ります。

それから最後にもう1つ、私からお願いがあります。卒業し、自活できるようになったら、素晴らしい伴侶を見つけ、家族を作ってください。いま日本は、急速に少子高齢化社会に突入しています。だから、私のお願いは、幸せな結婚をし、家族を作ってください、なのです。君たちが幸せな家族を作ることが、日本の未来につながるのです。

皆さんの輝かしい未来を心より祈ります。本日は卒業おめでとう。

## 来賓祝辞（大学院修了式）

豊田 章一郎 名古屋大学全学同窓会会長  
トヨタ自動車株式会社名誉会長



ただいまご紹介いただきました、名古屋大学全学同窓会会長の豊田章一郎でございます。本日はこのような厳粛なる修了式にお招きいただき、誠にありがとうございます。

まずもって、本日大学院を修了された皆様お一人おひとりに、心よりお祝いを申し上げます。別会場でこの式典をご覧になっておられますご家族、ご関係者の方々も、さぞかし、お喜びのことと存じます。

さきほど、総長の濱口さんより学位記を受け取られた代表の皆様、それぞれが、素晴らしい顔をされておられました。大学でしっかりと勉学に励まれていたことがよく分かり、大変うれしく思っている次第でございます。これからの長い人生に、名古屋大学での経験や成果を活かされ、素晴らしいものにしていただきたいと思います。

皆様には、将来、日本の新しい国づくりを担うリーダーとしての役割が期待されております。是非、日本が直面する現実をしっかりと直視し、今後日本の目指すべき姿に思いを馳せ、決して内向きにならず、大きな夢と高い志を持って、それぞれの道を切り拓いていただきたいと思います。



さて、皆様ご承知の通り、昨年、名古屋大学特別教授の赤崎 勇先生と天野 浩先生が、青色発光ダイオードの発明により、ノーベル物理学賞を受賞されました。これで名古屋大学からは野依良治先生、小林 誠先生、益川敏英先生、下村 修先生と、6名ものノーベル賞受賞者を輩出したこととなります。この度の快挙は幾多の困難にもくじけることなく、強い信念と情熱、そして不屈の精神で成し遂げられた偉業として、私も大いに勇気をいただきました。

本日、ご卒業される皆様にとりまして大変嬉しく、名古屋大学を母校として大いに誇りに感じていることと思えます。

現在、日本は産業・社会・企業だけでなく大学もグローバル競争に直面しており、名古屋大学は濱口総長のリーダーシップの下、「名古屋大学から Nagoya University へ」というキーワードで、世界に通じる人材の育成や世界トップレベルの研究を推進しておられます。

私は、今後ますます名古屋大学が国際競争力を向上させ、日本を支える大学になることを強く望んでおります。そのためには、名古屋大学と社会の連携、特に大学と卒業



生との密接な連携協力が不可欠であり、名古屋大学全学同窓会が「大学と社会を結ぶ必須の組織」となると考えております。すなわち、名古屋大学には、卒業生を大事にいただき、大学の状況や活動を発信するとともに、卒業生の活躍を把握していただきたいと思っております。逆に卒業生は、母校とのつながりを大事にしながら活躍していただき、同窓会を通じて母校を支援するという確かな関係を是非しっかりと築いて頂きたいと思っております。

名古屋大学全学同窓会は、平成14年10月に発足し12年がたちました。これまで、関東支部、関西支部及び遠州会の3つの国内支部だけでなく、韓国、バングラデシュ、上海、タイ、北京、ベトナム、カンボジア、モンゴル、ウズベキスタン、台湾、ラオス、ミャンマー、インドネシア、フィリピンの14の海外支部を作って参りました。私も昨年フィリピン支部の設立総会に参加させていただきましたが、改めて卒業生の皆様のご活躍ぶりを頼もしくも、嬉しく思いました。

さて、全学同窓会では、名古屋大学を支援するため、名

大基金をはじめ、同窓会カードとして、豊田講堂をレリーフした年会費永年無料の「名古屋大学カード」を発行しております。是非ともこのカードに入会していただき、名古屋大学支援にご協力をいただきたいと思っております。

また、いわゆる7大学、名古屋大学、東京大学、京都大学のほか4大学の同窓会として、学士会というものがございます。学士会は現在、会員5万人ですが、各7大学の交流、交友を深めていただくために、是非、皆様に学士会にも入会していただきたいと思っております。こうしたことを通じまして、これからもますます名古屋大学全体が発展していくことを希望しております。

また、濱口総長は今回最後の修了式になると伺っております。改めて、これまでのご活躍に対し敬意を表したいと思います。最後に、卒業される皆様におかれましては、健康には十分ご留意され、名古屋大学の卒業生として、自信と誇りを持って社会で活躍していただくことを心から祈念いたしまして、私のお祝いの言葉とさせていただきます。

本日は誠にありがとうございます。



## 来賓祝辞（学部卒業式）

岡田 邦彦 名古屋大学全学同窓会副会長  
元J.フロント リテイリング株式会社代表取締役会長

（豊田章一郎 名古屋大学全学同窓会会長・  
トヨタ自動車株式会社名誉会長祝辞代読）



ただいまご紹介いただきました、名古屋大学全学同窓会会長の豊田章一郎でございます。本日はこのような厳粛なる卒業式にお招きいただき、誠にありがとうございます。

まずもって、本日卒業された皆様、一人ひとりに、心よりお祝いを申し上げます。別会場でこの式典をご覧になっておられますご家族、ご関係者の方々も、さぞかし、お喜びのことと存じます。

さきほど、総長の濱口さんより学位記を受け取られた代表の皆様、それぞれが、すばらしい顔をされておられました。大学でしっかりと勉学に励まれていたことがよく分かり、大変うれしく思っている次第でございます。これからの長い人生に、名古屋大学での経験や成果を活かされ、素晴らしいものにしていただきたいと思っております。

皆様には、将来、日本の新しい国づくりを担うリーダーとしての役割が期待されております。是非、日本が直面する現実をしっかりと直視し、今後日本の目指すべき姿に思いを馳せ、決して内向きにならず、大きな夢と高い志を持って、それぞれの道を切り拓いていただきたいと思っております。



さて、皆様ご承知の通り、昨年、名古屋大学特別教授の赤崎 勇先生と天野 浩先生が、青色発光ダイオードの発明により、ノーベル物理学賞を受賞されました。これで名古屋大学からは野依良治先生、小林 誠先生、益川敏英先生、下村修先生と、6名ものノーベル賞受賞者を輩出したこととなります。この度の快挙は幾多の困難にもくじけることなく、強い信念と情熱、そして不屈の精神で成し遂げられた偉業として、私も大いに勇気をいただきました。

本日、ご卒業される皆様にとりましても大変嬉しく、名古屋大学を母校として大いに誇りに感じていることと思えます。

現在、日本は産業・社会・企業だけでなく大学もグローバル競争に直面しており、名古屋大学は濱口総長のリーダーシップの下、「名古屋大学から Nagoya University へ」というキーワードで、世界に通じる人材の育成や世界トップレベルの研究を推進しています。

私は、今後ますます名古屋大学が国際競争力を向上させ、日本を支える大学になることを強く望んでおります。そのためには、名古屋大学と社会の連携、特に大学と卒業



生との密接な連携協力が不可欠であり、名古屋大学全学同窓会が「大学と社会を結ぶ必須の組織」となると考えております。すなわち、名古屋大学には、卒業生を大事にいただき、大学の状況や活動を発信するとともに、卒業生の活躍を把握していただきたいと思っております。逆に卒業生は、母校とのつながりを大事にしながら活躍していただき、同窓会を通じて母校を支援するという確かな関係を是非しっかりと築いて頂きたいと思っております。

名古屋大学全学同窓会は、平成14年10月に発足し12年がたちました。これまで、関東支部、関西支部及び遠州会の3つの国内支部だけでなく、韓国、バングラデシュ、上海、タイ、北京、ベトナム、カンボジア、モンゴル、ウズベキスタン、台湾、ラオス、ミャンマー、インドネシア、フィリピンの14の海外支部を作って参りました。私も昨年フィリピン支部の設立総会に参加させていただきましたが、改めて卒業生の皆様のご活躍ぶりを頼もしくも、嬉しく思いました。

さて、全学同窓会では、名古屋大学を支援するため、名

大基金をはじめ、同窓会カードとして、豊田講堂をレリーフした年会費永年無料の「名古屋大学カード」を発行しております。是非ともこのカードに入会していただき、名古屋大学支援にご協力をいただきたいと思っております。

また、いわゆる7大学、名古屋大学、東京大学、京都大学のほか4大学の同窓会として、学士会というものがございます。学士会は現在、会員5万人ですが、各7大学の交流、交友を深めていただくために、是非、皆様に学士会にも入会していただきたいと思っております。こうしたことを通じまして、これからもますます名古屋大学全体が発展していくことを希望しております。

また、濱口総長は今回最後の卒業式になると伺っております。改めて、これまでのご活躍に対し敬意を表したいと思います。最後に、卒業される皆様におかれましては、健康には十分ご留意され、名古屋大学の卒業生として、自信と誇りを持って社会で活躍していただくことを心から祈念いたしまして、私のお祝いの言葉とさせていただきます。

本日は誠にありがとうございます。



## 濱口総長がベトナム・カンボジアからメダル、勲章を授与

本学からの長年の貢献が認められ、濱口総長はベトナムからメダルを、カンボジアから友好勲章を授与されました。本学ではこれまで、アジア地域において法学分野、生命農学分野、国際開発分野、医学分野をはじめ、様々な分野で特色ある活動を行っており、特に、昨年10月には、カンボジア、ベトナム、モンゴルにおいて、現地にサテライトキャンパスを設置し、アジア諸国の国家中枢人材を養成する博士教育プログラムを開始しました。

3月9日(月)には、本学のベトナムに対するこれまでの法学教育の取り組みに対し、ファン・チ・ヒエウ ベトナム司法省副大臣から総長と鮎京理事にメダルが授与されました。このメダルは大臣や、国際機関の長に与えられることが多く、学長職あるいは教授職での受賞は初めてのこととなります。メダル授与式はベトナム司法省において行われ、ベトナム司法省関係者、在ベトナム日本国大使館などから関係者が参加し、本学からは総長、鮎京理事、磯田アジアサテライトキャンパス（ASC）学院長らが参加し、厳かに式が進められました。



オーク・ラブーン大臣からメダルと賞状を受け取る濱口総長



ヒエウ副大臣から花束を贈呈された濱口総長と鮎京理事

その後のレセプションでは、ヒエウ副大臣から、特に法学分野における人材育成への協力に対し、日本政府及び日本国民、そして本学へ感謝の意が述べられました。さらに、ベトナムの法律及び司法の改革において日本のパートナーである本学からの支援を受け続けたい旨が述べられました。

その後、ファン・スアン・ニャー ベトナム国家大学ハノイ校学長を訪問し、続いて訪問したハノイ法科大学では、司法省副大臣兼務であるファン・チ・ヒエウ学長から、総長と鮎京理事に対するメダル授与のお祝いとして、花束と記念品が贈呈されました。

3月11日(水)には、本学のカンボジアにおける長年の貢献及び新たに開始された「アジア諸国の国家中枢人材養成プログラム」への謝意として、カンボジア政府を代表しオーク・ラブーン カンボジア農林水産省大臣から、総長にカンボジア友好勲章が授与されました。友好勲章は、2国間の友好を深めた外国人に与えられる勲章で、カンボジアで数種類ある外交関係叙勲の中でも最上位に位置づけられています。

叙勲式は、王立農業大学において行われ、オーク・ラブーン大臣をはじめ、ホー・マリン長官、ナム・アムノット長官などカンボジア農林水産省関係者、チン・マーリン司法省副長官、カウンターパートの王立プノンペン大学のンゴ・ブントアン学長、井崎 JICA カンボジア事務所所長、現地メディアのほか200名を超す学生が参加しました。本学からは総長、磯田 ASC 学院長らが出席し、大変華やかで盛大な式典となり、夜にはカンボジアのテレビ局により式典の様子が放映されました。

## 国際シンポジウム「臨床研究における正義」を開催



提言を述べる松尾副総長

生命・医療の法と倫理に関する国際シンポジウム「臨床研究における正義」が3月13日(金)、14日(土)に名古屋国際会議場国際会議室において開催されました。

このシンポジウムは、国際的な議論が必要な倫理的・法的・社会的問題について、グローバルな視点で現状を把握し議論を深めることで、これらの諸問題に関する研究と政策的な対応をまとめ、次世代の生命・医療にかかる法と倫理の国際標準の確立に寄与することを目指し開催されたものです。

2日間に渡り開催されたシンポジウムの1日目は、藤井理事の開会あいさつで始まり、曾根三郎日本医学会利益相反委員会委員長から来賓あいさつがあった後、森際康友法学研究科教授から趣旨説明が行われました。次いで、「わが国の臨床研究の現状と課題」をテーマに国別の報告が行われ、米国のジェフリー・カーン ジョーンズ・ホプキンス大学パーマン生命倫理研究所教授の報告を皮切りに、韓国の李 元馥 梨花女子大学校法学専門大学院副教授、中国の王 晨光 清華大学法学院教授、武藤香織東京大学医科

学研究所教授からそれぞれ報告があり、引き続き総合討論を行った後に、神保法学研究科長のあいさつで1日目を終了しました。

2日目は、高橋医学系研究科長からあいさつがあった後、ジェフリー・カーン教授の「臨床研究における法と政策の課題－グローバルな視点から」と題したプレナリー講演が行われました。その後、プレナリー講演を受けて位田隆一同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科特別客員教授、韓国の崔 敬石 梨花女子大学校法学専門大学院副教授及び中国の王 晨光教授から、各国に共通するグローバルな課題に対する対応についてそれぞれ報告が行われました。最後に、ジェフリー・カーン教授及び張 榮敏 梨花女子大学校法学専門大学院教授・梨花生命医療法研究所所長から、このシンポジウムの総括並びに今後は課題に対し共同で取り組んでいくことについて提案がありました。

シンポジウムの締めくくりとして、松尾副総長から閉会のあいさつを兼ねた提言が述べられ、臨床研究に関する国際ネットワーク作りを本学を中心とする4校からスタートして進めるとともに、次回は2017年に韓国のソウルで開催するとの発表があり、会場内からは大きな拍手が沸き起こりました。

今回のシンポジウムを機に、生命・医療の法と倫理にかかる欧米とアジアにおける教育研究拠点との間で教育研究に関する交流が一層進むことが期待されます。



講演するジェフリー・カーン教授

## 第3回「水田賞」授賞式を挙

第3回「水田賞」授賞式が3月3日(火)、本部1号館第2会議室において挙行されました。水田賞は、水田 洋名誉教授からのご寄附の意志に基づき、人文・社会科学（思想史）の分野で将来の発展が期待できる優れた研究能力を有する若手研究者を顕彰し、その研究意欲を高め、研究の発展を支援する目的で創設されました。今年度は第3回と



授賞式後の記念撮影（左から鮎京理事、総長、吉野中京大学専任講師、國枝理事、安藤教授）

して、人文・社会科学（思想史）の分野で、日本全国を対象として募集を行い、慎重な審査の結果、吉野裕介中京大学経済学部専任講師が選ばれました。

授賞式には、濱口総長、國枝理事、鮎京理事、鈴置副総長及び審査委員の安藤隆穂経済学研究科教授、田中秀夫愛知学院大学経済学部教授が出席しました。総長からは、「今回の受賞を励みに、今後も高い志をもって自らの研究に精進し、我が国の学術研究の発展に貢献していただきたい」とのあいさつがあり、続いて、國枝理事から受賞者の紹介及び研究テーマについての審査講評がありました。

受賞者からは、「誠に榮譽ある賞に選んでいただいて非常に光栄なことであり、明日からまた心を新たに学問に邁進していきたい」との謝辞がありました。

その後、総長室において、受賞者及び授賞式出席者の懇談が行われ、研究の動機や今後の研究の発展性についての意見交換がありました。

## 名古屋大学協力会10周年記念次世代ロボット講演会を開催

名古屋大学協力会10周年記念次世代ロボット講演会「これからのひと／ものづくりを支える次世代ロボット技術」が、3月3日(火)、ES総合館ESホールにおいて開催されました。本講演会は、我が国の「日本ロボット新戦略」のもと、中部地区の産学官が連携し、ロボット援用で製造業に構造的変革をもたらすための次世代ロボット技術開発



講演会の様子

を促進するために開催されました。

はじめに、学術研究・産学官連携推進本部長である松尾副総長からあいさつがあり、その後、2つの特別公演として、経済産業省製造局の今里和之氏から、「ロボットによる新たな産業革命に向けて」と題して、我が国の「ロボット革命」の考え方と戦略について、独立行政法人科学技術振興機構の岡山純子氏からは「欧米における次世代製造業強化策と研究開発戦略」と題して講演が行われました。

続いて、愛知県産業労働部の加納廣和氏から「ロボット産業拠点の形成を目指す愛知県の取組」の紹介があり、三菱電機株式会社名古屋製作所の奥田晴久氏から「次世代組立セルを支える知能化ロボット技術」と題して、生産現場に応用した例の講演がありました。本学からは、獅山学術研究・産学官連携推進本部副本部長から「産学官連携によるロボット産業発展のシナリオ」、山田陽滋工学研究科教授から「安全な人間ロボット共存系の構築－規制現状と応用可能性」、古橋 武工学研究科教授から「製造業におけるログデータ解析」について講演がありました。ロボット技術への関心の高さから参加者は125名と盛況でした。

## 「PhD プロフェッショナル登龍門」シンポジウムを開催

博士課程教育リーディングプログラム「PhD プロフェッショナル登龍門」(PhD 登龍門)の平成26年度シンポジウム「社会に羽ばたく博士人材の育成－英国 Vitae の経験と日本の取り組み－」が、2月19日(木)、名鉄ニューグランドホテルにおいて開催されました。

英国における博士人材の能力開発に関わる研究実績・プ



パネルディスカッションの様子

ロジェクト経験を集約する機能を備えた中核的組織である Vitae によるリサーチャー・トレーニングの経験は、大学院で教育を受けた人材の社会進出に有用な知識・経験を提供するため、日本の高等教育の今後を検討する上で重要であると考えられます。そこで、PhD 登龍門は、Vitae の経験から世界的な規模で進む高等教育の再編に関する情報を共有し、今後の博士人材育成のあり方を議論するために、英国政府の国際文化交流機関ブリティッシュ・カウンシルの協力を受けて本シンポジウムを開催しました。

第1部「英国における Vitae の取り組み」では、Vitae のジャネット・メトカーフ代表が基調講演を行い、それを受けてのパネルディスカッションでは大学・行政・産業界の関係者が Vitae の経験から日本の大学が得られる示唆について議論しました。また、第2部では、日本文化入門、英語力強化、海外研修など、これまでの PhD 登龍門の取り組みを紹介し、フロアーも交えた討論を行いました。

当日は、全国から100名を超す参加があり、活発な議論が展開されました。今後、PhD 登龍門では、日本版 Vitae の機能を持つ連携ネットワークの構築をめざして、他大学とも協力を強化していく予定です。

## 名古屋大学「東海東京フィナンシャル・ホールディングス・グローバル事業」に調印

名古屋大学「東海東京フィナンシャル・ホールディングス・グローバル事業」覚書への調印が、2月19日(木)に行われました。調印は同日開催された博士課程教育リーディングプログラム「PhD プロフェッショナル登龍門」の平成26年度シンポジウムにおいて、濱口総長と石田建昭・東海東京フィナンシャル・ホールディングス株式会社代表取

締役社長 最高経営責任者(東海東京証券株式会社代表取締役会長 最高経営責任者)の間で執り行われました。

本学は昨年8月に東海東京フィナンシャル・ホールディングス株式会社の特別協賛により、英国王立国際問題研究所主催の国際シンポジウムを豊田講堂において開催しましたが、その際に石田社長と総長の間で、東海地域の国際化を牽引できるグローバルな人材を育成するために、企業と大学がもっと協力するべきであるとの認識で一致しました。これが契機となり、英国における本学の研究・教育の交流を支援する目的で本事業が創設されることとなりました。

本事業では、PhD プロフェッショナル登龍門と教育推進部が中心となり、複雑な国際情勢の動きを市民・学生向けに分かりやすく解説する「国際情勢講座」の開催、英国ケンブリッジ大学やエジンバラ大学との学生の相互派遣、英国での拠点となる本学同窓会設立などの活動を実施していきます。

これらの活動を通して学生や市民にグローバルな国際情勢の変動に触れる貴重な機会を提供することにより、東海地域の国際化に貢献することをめざします。



調印式の様子(左が石田社長、右が総長)

## 名古屋大学基金感謝の集いを開催

名古屋大学基金感謝の集いが、2月21日(土)、豊田講堂において開催されました。「感謝の集い」は、名古屋大学基金に高額のご寄附をいただいた方々を招待し、同基金の活動報告や施設見学、ミニコンサート、そして総長主催の懇談会を開催し、本学の支援者の方々へ感謝の意を表すもので、今回で6回目となりました。



ミニコンサートの様子

「感謝の集い」開催に先立ち、昨年2月以降同基金にご寄附をされた方々を対象に、豊田章一郎名古屋大学基金支援会会長、濱口総長及び役員列席のもと「感謝状贈呈式」が挙行されました。

「感謝の集い」には、75名が出席し、学内施設見学として、2014年ノーベル物理学賞を受賞した天野 浩工学研究科教授の説明による赤崎記念研究館の見学会が行われました。

見学会の終了後には、豊田講堂ホワイエへ移動して、基金担当の國枝理事からの同基金事業報告に続き、同基金による支援留学生2名から、感謝の言葉や本学留学中の苦労話など日本語でスピーチが行われました。

その後、フルートアンサンブルグループ「LYNX」による「ピッコロ」、「フルート」、「アルトフルート」、「バスフルート」という4種類のフルートを使ったミニコンサートが開催され、出席者は素晴らしい演奏を楽しみました。

コンサート終了後に行われた総長主催の懇談会では、本学に対する期待と激励の言葉が寄せられるなど、大変有意義な機会となりました。

## 卒業・修了留学生を送る夕べを開催

平成26年度名古屋大学卒業・修了留学生を送る夕べが、3月18日(水)、南部食堂1階食堂において開催されました。これは、今春に卒業・修了して、就職や帰国等で本学を巣立っていく留学生の今後の活躍を激励、祝福し、本学での思い出の1つとなるよう開催されたものです。当日は、留学生と日頃留学生を支援していただいている関係諸団体、留学生関係教職員など約150名の参加がありました。

始めに、濱口総長から激励、祝福のあいさつがあり、来

賓を代表して山田忠明一般財団法人日本ガイシ留学生基金事務局長から祝辞がありました。

渡辺理事による乾杯の発声後、歓談が行われ、琴と日本舞踊も披露されました。続いて、名古屋大学留学生後援会からの記念品が各部署の卒業・修了代表者へ手渡され、2名の卒業・修了代表者から謝辞が述べられました。

最後に、國枝理事から閉会のあいさつがあり、大盛況のうちに終了となりました。



あいさつをする総長



留学生と記念撮影をする濱口総長

## 第48回経営協議会を開催

第48回経営協議会が、3月23日(月)、鶴舞地区の鶴友会館において開催されました。

会議では、濱口総長からあいさつの後、平成27年度学内予算配分、平成27事業年度における長期借入金の借入れ及び償還計画等、平成26年度運営費交付金（業務達成基準適用事業）執行状況、人事関係諸制度の見直し、名古屋大学



会議の様子

海外拠点勤務者の就業規則等の特例に関する規程、平成27年度計画、業務方法書の変更の認可申請及び国立大学法人名古屋大学経営協議会規程の一部改正について、総長、各担当理事及び副総長から説明が行われ、審議の結果、了承されました。

次いで、新執行部の職務分担等について意見聴取が行われた後、第3期中期目標・中期計画、平成27年度入学者選抜実施状況、名古屋大学基金、学生のメンタルヘルスケアの体制、名古屋大学アジアサテライトキャンパス学院及び次期経営協議会委員について報告が行われました。

外部委員の方々からは、第3期中期目標・中期計画について意見交換が行われ、貴重なご意見が寄せられました。

## 平成26年度退職者表彰式及び退職職員懇談会を開催

平成26年度名古屋大学退職者表彰式が、3月27日(金)、豊田講堂第1会議室において挙行されました。表彰式は、平成27年3月31日付けで退職する勤続30年以上の職員を表彰するもので、当日は、受表彰者33名のうち30名の職員が出席し、濱口総長から受表彰者一人ひとりに表彰状が手渡されました。続いて、総長から祝辞があり、永年にわたる本学

への尽力に対する感謝の言葉がありました。

引き続き、ユニバーサルクラブにおいて、名古屋大学退職職員懇談会が開催され、上記の受表彰者のほか、関係部局の職員が出席しました。総長のあいさつの後、退職職員を代表して河本達吾文系事務部長から謝辞がありました。懇談会では、退職職員が出席者と今日までの思い出などを語り、別れを惜しんでいました。



表彰状を手渡す総長

## 天野 浩工学研究科教授へ名古屋大学特別教授の称号を授与

天野 浩工学研究科教授への名古屋大学特別教授称号授与式が、3月16日(月)、広報プラザにおいて挙行されました。名古屋大学特別教授の称号は、本学卒業・修了生もしくは教員として在籍した者で、ノーベル賞、フィールズ賞、文化勲章、文化功労者等の賞もしくは顕彰を受け、研究教育活動において顕著な功績を修めた者に付与されます。これまでに、天野教授とともにノーベル物理学賞を受賞した赤崎 勇博士をはじめ、13名の方が称号を授与されています。

授与式には、濱口総長、理事等役員が出席し、総長から特別教授の証書が天野教授へ授与され、続けて、天野教授からは、ノーベル物理学賞受賞のレプリカメダルを本学へ寄贈いただき、総長へ手渡されました。

天野教授からは、今回の称号授与によって改めて責任感とともに、様々なことへチャレンジしていた若い頃の気持ちを思い出し、地球規模の問題に対しても解決に向けて取り組んでいきたいと決意が述べられました。



証書授与の様子



記念撮影

## 濱口総長退任式を挙行

平成27年3月31日をもって任期を満了する、濱口道成総長の退任式が、3月30日(月)、シンポジオンホールにおいて挙行されました。式には、役員等をはじめ、教職員約200名が出席しました。

総長からは退任のあいさつとして、6年間を振り返り、教職員への感謝とともに、アジア展開をはじめとした国際化を十分に進めることができたこと、若手育成プログラム(YLC)において優秀かつ個性的な人材を多く発掘できた

こと、今後、少子化など大学にとって困難な時代が予想されるが、本学でしかできない教育・研究活動を展開、継続してほしいことなどが述べられました。

最後に、総長への感謝を込めて職員から花束が贈られ、出席した教職員に見送られながら、総長は本学を後にしました。

なお、濱口総長は退任後、文部科学省科学技術・学術審議会会長として、今後も我が国全体の科学の発展のために尽力されます。



退任のあいさつをする総長



教職員から見送られ本学を後にする総長

## 特許クレーム解釈論——特許権の成立性・有効性判断と技術的範囲画定の前提を探る

西井 志織  
大学院法学研究科准教授

被告が「原告の特許は、特許無効審判（特許権を対世的に無効にできる唯一の手続であり、侵害訴訟とは無関係に、何人も特許庁に対して請求できるもの）により無効にされるべきものである」という抗弁を提出した場合には、同裁判所は、特許庁での無効審判と同じ基準でクレーム解釈を行った上で、発明の新規性・進歩性等を判断します。ここで無効と判断されれば、当該訴訟においては、特許権者の権利行使は認められません。

このように、クレーム解釈は、特許権の成立性・有効性を判断する前提としても、技術的範囲を画定する前提としても、枢要な作業であり、両局面での判断の結論に影響を与え得るものです。しかし、——そうであるがゆえに、という面もありますが——、「解釈」の際にどの範囲の資料をどのように考慮することができるのかという問題については、従来、各局面での結論を先取りしているかのような議論がなされがちであり、最近まで、理論的に整序された形での検討が必ずしも十分にはなされてこなかったきらいがありました。

この数年間は、従来の日本の判例・学説では、技術的範囲画定局面におけるクレーム解釈の際に考慮するのが当然であるかのように考えられてきた、「出願経過（出願がなされてから特許権が付与されるまでの経過）」という資料に焦点を当て、その考慮の当否に立ち返っての研究を行ってきました。ここから着想を得て、現在は、より高次の視点を設定して問題を捉え直す形で、クレーム解釈論を展開することを計画中です。

「知的財産立国」が国家戦略として打ち出されてから、はや13年が経ちました。日本という国家が様々な問題を抱えていることは疑いようのない事実ですが、知的財産の創出・保護・利用を適切に促す仕組みを構想することが、社会が再活性化した未来を招来するための一助となると考えています。

私の専門は「知的財産法」です。そのうち、特に関心を持って取り組んでいるのは、特許法です。特許法学は、たしかに、文系の学問である「法学」の一分野ですが、特許法の保護対象は、主に理系分野で生み出される「発明」です。その意味で、学際的性格を有する、知的刺激の大きな領域です。

私はその中でも、「クレーム解釈論」に魅了されています。特許権は、発明を無断で実施する他者を排除できるという非常に強い効力を有する権利であるため、権利の及ぶ範囲（原則的に特許権侵害が成立する範囲と考えて下さい。）はできる限り明確である必要があります。そこで、多くの国の特許法が採用しているのが、クレーム制度です。この制度の下、出願人は、出願に際して、自らが特許を受けようとする発明につき、クレーム（日本法でいう「特許請求の範囲」）という形で書面にして明確に記載することを求められます。

このように、たしかにクレームにより発明は特定されますが、もともと、クレームは、無体物（形のないもの）である発明を言語化したものであり、抽象的な言葉で書かれています。それゆえ、発明の実体を知るためには、クレームの文言がどのような意味であるのかを探求する、「解釈」という作業を行う必要があります。

特許庁に出願がなされると、審査官はクレームを解釈し、それにより突き止められた発明について、新規性・進歩性等の要件を充たすか否かを審査します。これらの要件を充たすと判断され、特許権が付与されると、クレームは特許公報に掲載されます（公示）。クレームは以後、権利が及ぶ範囲（日本法でいう「技術的範囲」）を画する基準となります。具体的には、特許権者が侵害訴訟を提起すれば、裁判所はクレームの解釈を行い、そこから明らかになる技術的範囲に被告の製品が属するか否かを判断します。属すると判断されれば、原則的に、特許権侵害が成立します。ただし、



豊田講堂の時計台には、赤崎特別教授、天野教授の画期的発明である青色LEDに係る特許技術が用いられている。

# 火山で発生する地震と噴火の予測

熊谷 博之 大学院環境学研究科教授

地震が起こると、小さく揺れた後に大きく揺れる波（P波とS波）が観測されます。これらの波は断層面でのすべりによって生じています。火山ではこのような“普通”の地震だけでなく、かなり変わった地震が発生します（図1）。単一の周期で振動したり、パルスのような波形を示したり、さらには振動が長時間にわたって継続するなど、普通の地震の波形とは大きく異なる特徴を示します。このような地震は火山性地震や微動と呼ばれており、これらの研究が火山地震学という分野で行われています。

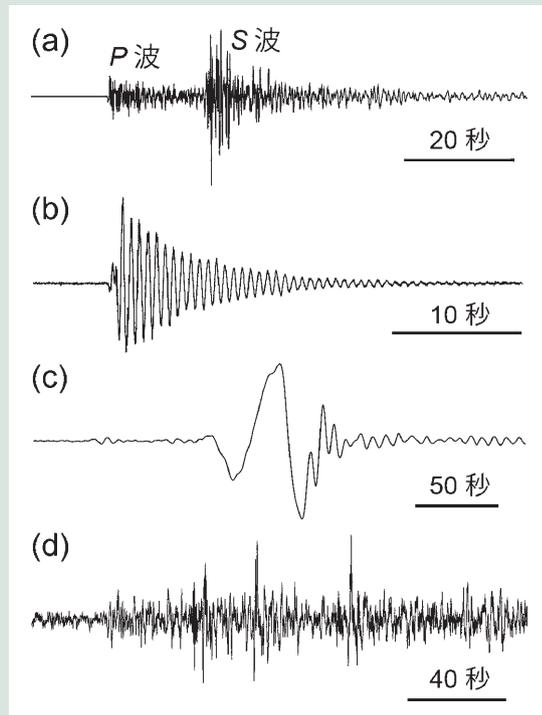


図1 (a) 断層すべりによる地震の波形。(b)–(d) 火山で発生した地震の波形。

火山地震学が100年ほど前に誕生してから長い間、火山性地震・微動がどのような原因で発生しているのかを正確に推定することは困難だったのですが、最近20年ぐらいの間にその研究は世界中で一気に進みました。高性能地震計の小型化やデジタル信号処理・通信技術の高度化により、火山に多くの観測点が配置され、高品質のデータが得られるようになりました。さらに、波形を定量的に解析する手法の開発やモデルの構築が進みました。その結果分かったことは、火山性地震・微動の発生には、マグマや熱水などの流体とその周りの岩体や大気との相互作用による多様な現象が関与していることです。これは、普通の地震が断層すべりと単純に説明できることとは極めて対照的です。この多様性が、火山性地震・微動の研究の難しいところであり、興味深いところでもあります。

その多様性の中において、マグマの移動とガスの発生が重要な役割を果たしていると考えられています（図2）。地表付近にマグマが上がってくるとダイクと呼ばれる割れ目が形成され、その周辺に変形を起こします。またマグマの中にはガスの成分が含まれているのですが、マグマが上昇するとその中に溶け込むことが出来ずに発泡します。さらにマグマの上昇により、浅部にある地下水が熱せられて沸騰します。このようなプロセスが火山性地震・微動の発生に関与しているのです。

これらは、噴火の前に起こる現象でもあります。よって火山性地震・微動を理解することは噴火の予測にも役立つはずですが、実際、2000年に相次いで起こった有珠山や三宅島の噴火では、噴火の前に多くの地震が発生し、それらの情報等に基づいて住民避難が行われました。しかしながら、

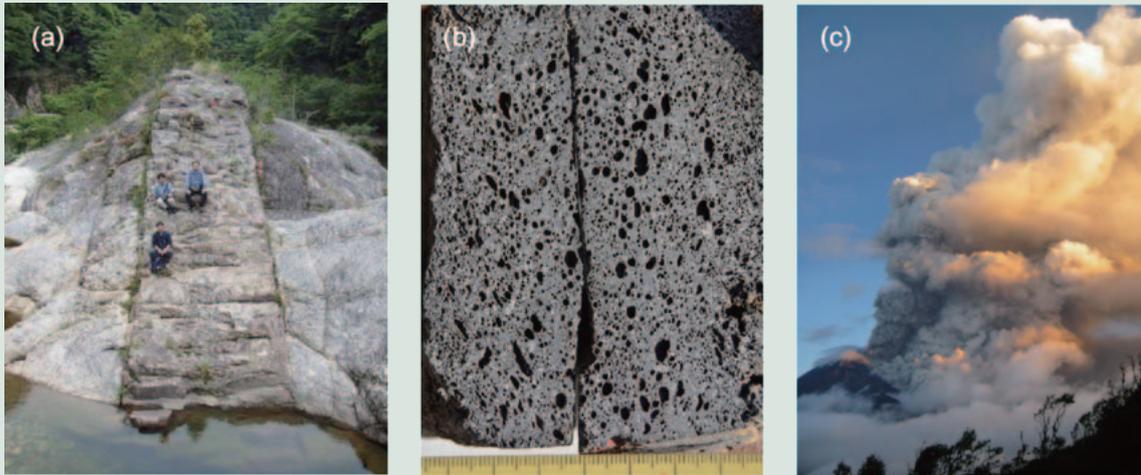


図2 (a) マグマの上昇によって生じた割れ目（ダイク）の露頭写真（愛知県新城市の馬背岩）。人が座っている部分がダイク。(b) マグマにおいてガスが発泡した痕跡（産業技術総合研究所 下司信夫博士提供）。(c) 南米エクアドルのトゥングラワ火山で2006年7月に起こった噴火。

2014年9月27日の御嶽山噴火では戦後最悪の人的被害を出すという結果となってしまいました。研究が進んだのに、なぜ噴火の予測が出来なかったのでしょうか？

そこに多様性という問題があります。御嶽山は2007年にも小規模な噴火を起こしており、この時には噴火前2カ月にわたって活発な地震活動がありました。2014年にも噴火前に地震は起こったのですが、その発生からわずか2週間程度で噴火に至ってしまいました。同じ火山なのに、噴火ごとに地震の起こり方が大きく違ったわけです。気象庁は今回の地震活動を見落としていたわけではありませんが、残念ながら警戒情報に役立てることが出来ませんでした。

さらに厄介な問題もあります。地震の発生なしに起こる噴火もあるのです。ほとんどニュースに

ならなかったのですが、2014年8月3日に口永良部島で噴火がありました。この噴火前に地震の発生数の増加や地面の変形は観測されず、突然噴火が起こったのです。幸い被害はなかったのですが、入山は規制されていなかったため、御嶽山の噴火のように被害が起こってもおかしくない危険な状況でした。

研究が進んだとはいえ、噴火を予測することはこのように大変難しい問題なのです。2011年東北地方太平洋沖地震の発生により、日本列島は地震だけでなく火山も活動期に入ったという説もあります。火山の監視体制の強化と科学的な研究の推進に加えて、警戒情報の発出や情報伝達の改善、登山者へのリスクの啓蒙など、噴火災害を軽減するための総合的な取り組みが今求められています。

1993年名古屋大学大学院理学研究科博士課程中退。1994年名古屋大学にて博士（理学）取得。名古屋大学理学部助手、米国地質調査所客員研究員、(独) 防災科学技術研究所主任研究員を経て、2013年より名古屋大学大学院環境学研究科教授。専門は火山地震学と地震発生物理学。アジア・南米諸国における地震・火山監視の高度化に関するJICA技術協力プロジェクトや地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム（SATREPS）にも参画。趣味はアコースティックギターの演奏と読書とランニング。

くまがい ひろゆき



## 平成26年度名古屋大学総長顕彰

## 8名1団体を表彰



平成26年度名古屋大学総長顕彰授与式が、3月25日(水)、午後4時15分より、豊田講堂第1会議室において行われ、8名の学生と1団体が表彰されました。

総長顕彰制度は、学問の研鑽や文化・社会活動等を通じて、「名古屋大学学術憲章」の目指す人物像を実践している学生を称えるために平成15年度に創設されたものです。顕彰の対象は、「学修への取り組み」(学修において成果が伴う取り組みを積極的に行っており、その姿勢・成果が他者の模範となると認められる者)及び「正課外活動への取り組み」(社会貢献活動、ボランティア活動、課外活動等において優れた評価を受けた者、又は本学の名誉を著しく高めた者)の2部門からなります。

今年度は、「学修への取り組み」部門に5件の学部推薦があり、また、「正課外活動への取り組み」部門には自薦・他薦を合わせて12件の応募がありました。

これら合計17件の推薦・応募について、理事及び部局長等で構成する総長顕彰委員会における審査の結果、「学修への取り組み」部門で5名、「正課外活動への取り組み」部門で3名・1団体が受

賞しました。

授与式終了後に行われた総長と受賞学生との懇談会においては、終始なごやかな雰囲気の中、総長から学生に対する将来への激励があり、また、関係教職員と受賞学生による活発な意見交換が行われました。

#### 全体の講評

今年度で12回目を迎える総長顕彰制度への推薦・応募のあった学生達の取り組みは、意欲や姿勢、各活動への情熱や熱意が感じられ、とても素晴らしいものばかりでした。惜しくも受賞を逃した学生も甲乙付けがたい内容であり、今後の活躍が楽しみです。

受賞した学生・団体においては、名古屋大学の目指す「勇気ある知識人」としての更なる研鑽を積み、今後の学生生活、社会生活において、後に続く本学の他の学生の目標となりうる人材としてのさらなる成長を期待します。

## 「学修への取り組み」部門

氏名	学部学科・学年	受賞理由
藤田 舜 ふじた しゆん	教育学部人間発達科学科 4年	入学以来一貫して言語に強い関心をもち、学修に取り組んできた姿勢は、学問に対する純粋な探求心と卓越した成果にあらわれている。また市民参加型セミナーを通して自らが学修したことを社会に還元する活動も評価できる。大学院進学後も「課題を作ることは自分の作品を作ること」という信念と「幅広く丁寧に貪欲に学びたい」という気持ちを大切に、他の学生の規範となる活躍することを期待する。
竹林 佳澄 たけばやし かすみ	経済学部経済学科4年	正規科目に関する優秀な成績と本学の進めるグローバル化教育への積極的な取り組み、講義やゼミナールへの積極的な参加姿勢は、本学の学生の規範になるものである。自発的努力を怠らない姿勢と海外研修で得た経験を大切に、卒業後は社会人としてさらに活躍することを期待する。
アラマヨ Alemayehu ダウィット・ハイル Dawit Hailu	理学部生命理学科4年	日本大使館推薦奨学生としてエチオピアから留学し、ほぼ完璧に近いまでの日本語を習得して他の学生と同じように日本語での講義を受講し、優秀な成績を修めたことは高く評価できる。非常に高いモチベーションを持って研究すると共に国際交流にも積極的に参加する姿勢も他の学生の規範となっている。大学院進学後もさらに研究を進展させ、将来は日本とエチオピアの架け橋として積極的な活躍することを期待する。
劉 東昊 リウ ドンホ	工学部化学・生物工学科 4年	日韓理工系留学生として入学し、日本語の勉強をしながら工学部の同学年で1位の成績を修めたことは強い意志と努力の賜物である。復習と予習を完璧にこなし、専門分野以外の基礎科学分野の知識も積極的に習得すると共に、日本語や英語のさらなる高度な習得も他の学生の規範となっている。将来は語学を活かし、世界に向かって羽ばたく活躍することを期待する。
深谷 祥葉 ふかや しょうは	農学部生物環境科学科 4年	入学時からの目標に従って、環境問題に強い関心をもって自然科学から人文科学、社会科学まで積極的に学修し、1年間の留学の中で様々な国の学生や教員と交流して語学力と国際的視野の拡充に努めてきたのは、多くの学生の規範となっている。また、ユネスコ国際会議のスタッフ等としての活躍も他の学生の刺激となっている。将来は社会人として森林や環境について学んだ幅広い知識に裏付けされた活躍を期待する。

## 「正課外活動への取り組み」部門

氏名・団体名	代表者	分野	受賞理由
名古屋大学 漕艇部	関根 優佳 せきね ゆか (医学部保健学科 3年)	正課外活動 (部活動等)	「全日本大学選手権大会（インカレ）」で優勝し、「全日本選手権」で準優勝したことは本学の名誉を大いに高めた。授業の出席と早朝及び授業後の厳しい練習を両立させる文武両道の姿勢は他の学生の規範ともなる。「最後まで努力することの大切さ」を大切に、今後もさらなる活躍を期待する。
山田 貴之 やまだ たかゆき (工学部物理工学科 4年)		正課外活動 本学への貢献活動	「老人が安心して外出できる社会」を実現したいという熱い想いのもと、既成概念にとらわれず新しい構造の導入と独自のアイデアを駆使して「テクノルネサンス ジャパン」東レ部門の最優秀賞を獲得したことは本学の名誉に大いに貢献した。今後はそのアイデアの実現に向けてさらなる試験と改良をし、未来に向けて社会貢献することを期待する。
西影 星二 にしかげ せいじ (医学部医学科5年)		正課外活動 社会への貢献	学生として勉学に励みながら、テノールのオペラ歌手として数々のオペラ公演やコンサートに出演して音楽活動をし、芸術振興と普及に貢献したことは高く評価できる。その中で培った世代や国籍を超えた繋がりを生かし、これからも幅広く社会に貢献することを期待する。
河合 さやか かわい さやか (文学部人文学科 2年)		正課外活動	「本を通して人を知り、人を通して本を知る」という理念を持ち「全国大学ビブリオバトル2014」で準チャンピオンに選ばれたことは本学の名誉を大いに高めた。本離れが進む現代社会の中で、多くの本を読むことのみならず、読書の楽しさを多くの学生に伝え、名古屋大学図書館を盛り上げる活動をしていることは大いに評価できる。今後も読書の魅力を多くの学生に伝え、積極的に活動していくことを期待する。

# 平成26年度名古屋大学総長顕彰 受賞者及び受賞団体のことば

「学修への取り組み」部門

## 英語からドイツ語、そして多言語へ

藤田 舜 教育学部人間発達科学科4年



さまざまな外国語の教科書や参考書

私は、第2外国語としてドイツ語を学び始めてから、言語に対して強い関心を抱くようになり、他にも複数の外国語（フランス語、ラテン語など）を学んできました。言うまでもなく英語の重要性は小さくありませんが、他の言語を学ぶ価値も小さくないと思います。加えて、さまざまな外国語を学んでいく中で、英語や日本語に対する理解も（少しは）深まってきたように感じます。卒業論文では、ドイツのある少数言語に着目し、それを保護・育成しようとしている人々の意識について考察しました。その研究過程では、ドイツ語文献を取り寄せて読むこともありました。卒論やレポートなどの課題（work）では、ことばを選びながら丁寧に記述し、質の高い作品（work）に仕上げることを心がけてきました。

この4月からは、大学院生として学習・研究を続けることとなります。今後も、さまざまな言語に触れるとともに、洗練された文章を書くことを目指していきます。

ふじた しゅん 1992年生まれ 三重県出身

「学修への取り組み」部門

## タイ・シンガポール視察研修旅行での学び

竹林 佳澄 経済学部経済学科4年



タイのチュラロンコン大学にてプレゼンテーションを行っている様子

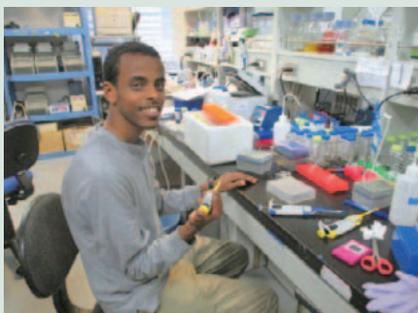
私の大学生活の中で最も刺激的であり多くの学びを得た経験は、3年次の夏に行った「タイ・シンガポール研修旅行」です。現地大学での英語でのプレゼンテーション・ディスカッションや日系企業の現地支社の工場・オフィス見学、現地スタッフの方との交流等を体験しました。この研修で得た学びは「英語力はもちろん伝えようとする姿勢が重要であること」、「海外を知ることは同時に日本を見つめ直すことでもあるということ」です。卒業後は企業で働きますが、この学びは海外で働くことに限らず、国内で働く上でも大きな価値のあることであると感じています。日本人同士であっても自分と異なる背景、考えを持つ様々な人々と関わりながら働き、また自分の未知の分野に挑戦しなければいけないことも多々あるかと思っています。そのような中で異なる考えの人と積極的に関わることや、自分の外の世界を知ることの大切さを実感できたこの研修は大きな財産になりました。

たけばやし かすみ 1993年生まれ 静岡県出身

「学修への取り組み」部門

## 留学生から架け橋に

Alemayehu Dawit Hailu 理学部生命理学科4年



実験台にて

国費留学生として東アフリカのエチオピアから来日しました。日本語は1年間勉強しただけだったので、名大理学部の講義の速さ、内容の深さに対応できるか不安でした。同級生のサポート、図書館での勉強により、1年後は不安がなくなり自信を持つようになりました。その後は、授業を楽しく受けながら生命理学の基礎知識を深めていきました。卒業研究で自分の手で実験を行うことになり、何回も失敗しながら実験を繰り返して技術を磨きました。学問以外の活動として、国際センターで開催された地球の言葉を紹介する企画で、一般市民向けに講座を担当したことは、国際交流のいい経験になりました。

これからは名古屋大学で修士課程、博士課程に進み、論文を書くことを通して論理的思考力を身につけていきたいと思っています。最終的には日本語と母国のエチオピアの言葉が話せる人として両国の理解を深め、日本とエチオピアの架け橋になりたいです。

アラマヨ・ダウィット・ハイル 1989年生まれ エチオピア出身

## 「学修への取り組み」部門

### 社会に貢献できる研究者への一步

劉 東昊 工学部化学・生物工学科4年



フレキシブルな高導電性タンタル硫化物/有機物ハイブリッド薄膜

私は、社会に貢献できる化学者になることを目標として上記の学科に入学し大学生生活を送って来ました。学部3年生までには化学系の専門科目を主に勉強し、多様な理論を理解しながら化学研究者になるための基礎を築きました。さらにグローバル社会で活躍するために語学(英語+日本語)も勉強して公認試験の点数をとりながら英語力の向上のためにも頑張りました。学部4年生になってからは導電性薄膜の研究を行い、硫化タンタルを宿主物質とした無機/有機ハイブリッド高導電性薄膜の作製に成功しました。この物質は優れた柔軟性を持つ薄膜で、グラフェンに匹敵する物性を有します。従って、リチウム電池の導電性電極の材料として有用に使われる可能性があり、さらに研究する価値がある薄膜であると考えられます。

大学卒業後は東京工業大学の大学院修士課程に進学します。修士課程では有機トランジスタ、有機半導体等の研究に挑みますが高性能材料を合成するために努力しようと考えています。最終的には国家研究所に入り、化学研究者になるのが夢であります。

ユ・ドンホ 1991年生まれ 韓国出身

## 「学修への取り組み」部門

### 語学から学んだもの

深谷 祥葉 農学部生物環境科学科



Fika (ティータイム) で友達と多くのことを話しました(スウェーデンのカフェにて)

私は世界的視点と世界に通用するコミュニケーション能力の獲得を目標に取り組んできました。社会人一步手前の大学で留学をし、日本や世界を見つめ直す機会・興味があった「持続可能な社会作り」を世界的に考える機会を持ちたかったからです。国際交流サークルや留学生のチューター活動を通し実践的な語学を身につけ、3年次にスウェーデン・ウプサラ大学へ1年間交換留学をさせて頂きました。そこではハイレベルな授業やディスカッションから、様々な国の人々の価値観や、環境・森林大国と詠われるスウェーデンの現状、考えを学べました。そして日本の文化と現状を重ね合わせ、どう社会構築を行うべきかを考えるいい機会となりました。またこれらは英語があつてこそその体験だったため、語学学習の大切さも実感しました。卒業後は製紙会社で働きます。農学部で得た知識と海外での経験を活かし、森林と産業との関わりを中心に持続的な社会作りに貢献したいです。

ふかや あきは 1991年生まれ 愛知県出身

## 「正課外活動への取り組み」部門/正課外活動

### 日本一を目指す素人集団

#### 漕艇部

関根 優佳 医学部保健学科3年



第41回全日本大学選手権大会女子舵手なしペア決勝

本学漕艇部は今年で創部104年目を迎える大変歴史のある部活です。本年度は第41回全日本大学選手権大会に女子舵手無しペアという種目でも出場し、創部以来初の優勝を飾ることができました。

漕艇部員の大多数は、大学から競技を始める、いわゆる「素人集団」ですが、全日本の試合で勝つためにはどうすればよいか論理的に考え、日々練習に励んでいます。また、漕艇部の活動は艇友会と呼ばれるOBOG団体、本学の援助によって成り立っています。創部100年目には新人合宿所も完成しました。こうした十分な支援体制と練習環境に恵まれているため、私立の強豪大学とも互角に戦える力を養うことができるのです。

今後は、新人の育成や個人のスキルアップに加え、マネージャーによる栄養管理に特に力を入れ、さらなる飛躍を目指しています。

せきね ゆか 1993年生まれ 滋賀県出身

「正課外活動への取り組み」部門／正課外活動・本学への貢献活動

老人が安心して外出出来る社会の実現を目指して

山田 貴之 工学部物理工学科4年



テクノルネサンスにて最優秀賞を受賞した時の様子

私は昨年11月に開かれた日本経済新聞社主催の製品アイデアコンテスト「テクノルネサンス ジャパン」にて最優秀賞を頂くことが出来ました。私がこのテクノルネサンスに応募しようと思ったきっかけは、祖父が昨年の春頃に散歩中に転倒をし、寝たきりになってしまった出来事があったためです。それ以降はたくさんの教授の方に技術的なアドバイスを頂き、また地元の老人ホームにも訪問し、老人の方の生活の生の声や実態を見学させて頂きました。

試行錯誤の中、F1に採用されている安全技術などを組み合わせる事により、理論値として既存の製品と比べて中程度の怪我の確率を95%から45%に、重傷になる確率を18%から1%にまで下げることが可能となりました。

これからも「老人が安心して外出できる社会」の実現に向けて活動していきたいと考えております。

やまだ たかゆき 1993年生まれ 岐阜県出身

「正課外活動への取り組み」部門／正課外活動・社会への貢献

医学とオペラ歌手の両立を目指して

西影 星二 医学部医学科5年



オペラでの一場面  
(愛知県芸術劇場コンサートホールにて)

私は今、医学部の学生として医学を学びながら、テノール歌手として音大卒業生やプロの演奏家に交じってオペラやコンサートに出演したり、コンクールに挑戦したりしています。今年度は、大阪国際音楽コンクールやKOBE国際音楽コンクールといった国内の著名なコンクールでプロを目指す音大生・音大卒業生と競い、上位入賞を果たしました。

オペラでも、名古屋や東京などで本格的な公演でキャストとしてデビューした他、文化庁の平成26年度新進オペラ歌手育成事業のオーディションにおいて世界的ソプラノ歌手のM.デヴィアー氏に推薦され、今年2月に新国立劇場でのコンサートでオーケストラと共演するなど、大きな躍進の一年になりました。

今後も医学を学びつつ、より高いレベルで音楽が演奏できるようにトレーニングを続けていき、医学とオペラ、両方の世界で貢献していけるような人物になることを目指して日々励んでいきたいと思っています。

にしかげ せいじ 1991年生まれ 兵庫県出身

「正課外活動への取り組み」部門／正課外活動

人を通して本を知る、本を通して人を知る

河合 さやか 文学部人文学科2年



京都決戦 授賞式にて

ビブリオバトルとは、5分間で本の内容をプレゼンしあう知的書評ゲームです。名古屋大学では一昨年からはじめ、学生・図書館・教職員を巻き込んで活動の輪を広げてきました。現在も私の所属するHontomoというサークルが中心となって、毎月中央図書館でビブリオバトルを行っています。

私がビブリオバトルに夢中になっている理由は、「人を通して本を知る、本を通して人を知る」というキャッチコピーに集約されています。ビブリオバトルが行われる空間には、はじめて出会う本があり、はじめて聞く発表者のエピソードがあり、知的な興奮を共有することができます。また、本を読んで得た知識は、自分の言葉にして語ることでたしかなものとなり、読んでいたときには気づかなかった視点を得られることもあります。

今後は、2014年春に中央図書館で行った「ビブリオバトル特別交流戦 名大生×図書館職員」のような、学生と学内外の方をつなぐ知的イベントを行いたいと考えています。

かわい さやか 1994年生まれ 愛知県出身

## 文学研究科公開シンポジウムを開催

●大学院文学研究科

大学院文学研究科は、3月7日(土)、文学研究科237号室において、文学研究科公開シンポジウムを開催しました。同研究科では、文学部同窓会とも連携し、毎年3月に、同窓生及び一般向けの公開シンポジウムを開催しています。シンポジウムのテーマは毎年異なりますが、今年は、「辞書の世界：意味の沃野を巡る」と題して、辞書をテ



シンポジウムの様子

マに取り上げました。当日は、同研究科の教員や学生を含め、約50名の聴衆を前に、2つの講演とパネルディスカッションを行いました。

まず、山田 進聖心女子大学教授による講演「意味から引く辞書」では、単語の意味を調べるための通常の辞書ではなく、逆に、意味から単語を調べるための辞書について、ネット検索との類似性の観点から、その有用性が提起されました。また、峰岸真琴東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授による講演「アジアの辞書作り：これまでとこれから」では、アジアの諸言語はそれぞれ文字が異なっているため、現在のIT環境で辞書を作るには、その前提として、それぞれの文字をコンピュータ上で処理する必要があるという説明があり、そうであるならば、むしろそれを利用して、多言語データベースを構築することが可能ではないか、という将来に向けた展望が示されました。パネルディスカッションには、ディスカッサントとして町田 健文学研究科教授も参加し、2つの講演で提起された問題や、そもそも単語の意味は定義できるのかといった、より根本的な疑問まで、多岐にわたる議論を行いました。

## 第13回坂田・早川記念レクチャーを開催

●大学院理学研究科

大学院理学研究科は、3月14日(土)、名古屋市科学館において第13回坂田・早川記念レクチャーを開催しました。同レクチャーは、坂田昌一博士、早川幸男博士の業績を讃えつつ、21世紀を担う研究者の発掘及び育成を目的として設けられました。今回は、湯川理論誕生80年、坂田模型誕生60年を記念し、日本を代表する原子核・ハドロン理論



講演の様子

物理学者である矢崎紘一理化学研究所客員主管研究員を招きました。38名の高校生を含めた190名の一般参加者及び26名の物理学教室メンバーから参加がありました。

講演会では、名古屋市科学館の瀨瀬 満館長、篠原理学研究科長からあいさつがあり、引き続き、選考経緯の説明の後、矢崎博士へ記念メダルが授与されました。その後、「核力の研究をたどる -湯川の間子論から格子ゲージ理論まで-」と題した講演が行われ、湯川理論に始まる核力の研究を軸にして、ハドロンのクォーク模型から、その基礎理論として確立した量子色力学、さらにこの力学を数値的に扱う手法としての格子ゲージ理論に至るハドロン物理の進展がわかり易く紹介されました。

講演会後の質問コーナーでは、高校生などから「クォークのカラー」や「スピン」などに関する質問があり、丁寧に説明がされました。「今後の50年の発展は」との質問に対しては、自身の50年の経験における「計算機性能の進歩」をとりあげて、量子色力学から直接に原子核を記述する方向が進むとの展望が述べられました。また、講演会場前では、ポスター展示による物理学研究室紹介などが行われ、一般参加者との間で活発な議論が行われました。

## 公開講演会を開催

●大学院国際言語文化研究科

大学院国際言語文化研究科は3月6日(金)、文系総合館において、公開講演会「恋愛と結婚の前近代・近代・脱近代」を開催しました。

今回は、公開講演会の一環としてデビッド・M・ノッター慶応大学教授を招き、講演が行われました。「好きな人と固く結ばれる」という観念は、社会学ではロマンチック・



講演するノッター教授

ラブ・イデオロギーと言われていています。運命の相手に一目惚れし、すべての障害を乗り越えて結婚し、情熱を生涯に渡り維持していくというこの観念は、特に英米では19世紀から20世紀中頃まで支配的でした。日本もこの観念の影響を強く受けましたが、在日30年、日本人の配偶者を持つノッター教授は、日本人の結婚観はむしろ友愛婚に近いと説明しました。友愛婚は歴史的には17-18世紀の英国で形成された考え方で、家と家との結びつきによる家父長制型結婚とは異なり、個人が配偶者を選択でき、夫婦間の感情や相性を大事にしていく結びつきです。日本では理想的異性像としての「やさしいひと」がまさにそれで、これは英米には見られない現象です。

1980年代から「愛・性・結婚」の三位一体が崩れ、従来の結婚観は席捲されつつあり、感情的満足が得られないならゲーム・オーバーというトレンドが優勢になっています。この風潮を、社会学者であるノッター教授は、親近性などの社会学概念を紹介しながら、必ずしも嘆くべきではないと指摘しました。現在の結婚の制度上の意義はどういうことなのか、学生から高齢者まで幅広い世代の参加者が考えるよい機会となりました。

## 第2回エネルギーシステムシンポジウムを開催

●エコトピア科学研究所

エコトピア科学研究所は、3月10日(火)、ベンチャービジネ斯拉ボラトリー3階ベンチャーホールにおいて、第2回エネルギーシステムシンポジウム「半導体パワーデバイスの電力システムへの応用」を開催しました。この催しは、エネルギーシステム(中部電力株式会社)寄附研究部門が企画する2回目となるエネルギーシステムシンポジウムで



シンポジウム開催時の様子

あり、今回は分散型電源の大量導入や新素材の開発促進から注目が高まっているパワー半導体デバイス、パワーエレクトロニクス機器がテーマとなりました。

最初に田中エコトピア科学研究所長から同研究所の紹介があり、続いて、昨年ノーベル物理学賞を受賞した天野 浩工学研究科教授からあいさつがあり、青色発光ダイオードだけではなく次世代のパワーデバイスとしても着目される、ガリウムナイトライドとパワーエレクトロニクス機器の関連性が述べられました。引き続き、舟木 剛大阪大学大学院工学研究科教授からパワーエレクトロニクス技術やパワー半導体デバイスの基礎的な理論、開発の歴史、そして次世代デバイスがもたらすであろう今後の動向について、杉本重幸中部電力電力技術研究所研究主任から、日本の電力システムへのパワーエレクトロニクス技術の適用例について、川上紀子東芝三菱電機産業システムパワーエレクトロニクス部技術主幹からはパワーエレクトロニクス技術を用いた再生可能エネルギー発電や省エネルギー技術について講演が行われました。傍聴者は63名に及び、最後には学生から講演者への質問も行われ、盛況のうちに閉会となりました。

## 大学教育改革フォーラム in 東海2015を開催

●高等教育研究センター

高等教育研究センターは、3月7日(土)、IB電子情報館、ES総合館及び中央図書館において、「大学教育改革フォーラム in 東海2015」を開催しました。10回目の開催となる今回は、344名が参加し、昨年度に引き続き、東海地区のみならず全国各地から、多くの方々の参加がありました。

当日は、IB電子情報館での秦 敬治追手門学院大学副



ポスターセッションの様子

学長による基調講演「大学教育改革を進めるために必要なものとは」で幕を開けました。その後、ES総合館に会場を移し、ポスターセッションと物理学講義実験研究会によるミニワークショップを同時に開催しました。26件の発表があったポスターセッションは、会場を埋め尽くすほどの活況を呈し、参加者投票による優秀ポスター賞の選出も行われました。

午後には、長期学外実習での学びを支える教職員の関わり、授業改善、大学職員力の形成、教育創造のネットワーク、授業設計、教務の実践的知識の積み上げと継承、大学業務の高度化、図書館での学習支援というテーマのもと8つのオーラルセッションを開催しました。各セッションでは、パネリストによる報告をもとに活発な議論が交わされました。

フォーラム終了後に開かれた情報交換会では、100名を超える参加者による賑やかな相互交流が行われました。高等教育研究センターでは、同フォーラムを発展させ、東海地域の大学全体のさらなる活性化を目指します。

## 第4回地球教室を開催

●博物館

博物館は、2月21日(土)、22日(日)の2日間、平成26年度4回目のフィールドセミナー地球教室「鉱物をさがそう!」を開催しました。定員数を大きく超える80名以上の応募があり、抽選により小学3年生から高校1年生と保護者、一般の方あわせて29名が参加しました。

1日目は、共催の名古屋市科学館において鉱物の観察を



ハンマーを手に鉱物をさがす参加者の様子(西尾市三田石材の採掘場にて)

行いました。まず、鉱物について、その見分け方について講義を受けた後、実際の鉱物標本を用い、結晶形や硬度、磁性などの属性を調べて特徴を把握し、最後に鉱物鑑定試験を行いました。

2日目は、西尾市の三田石材株式会社の許可の下、採石場において鉱物の採集を行いました。参加者は、前日の座学で養った鑑定眼をたよりに、岩石をハンマーで割りながら自力で鉱物を探しました。次に、蒲郡市生命の海科学館へ移動し、採集されたザクロ石や電気石などを顕微鏡で観察し、さらにそれらを用いて簡単なオブジェ作りを行いました。参加者は、自らが発見した小さな自然美を注意深く丁寧に観察していました。

この事業は参加者の安全確認と活動補助のために、愛知大学名古屋一般教育研究室の援助を受けて開催しています。地球教室はリピーターが多く人気のある企画ですので、今年度も新たな企画内容を盛り込みながら全4回の開催を予定しています。

## 第60回博物館コンサートを開催

### ●博物館

博物館では、3月14日(土)、同館展示室において、第60回名古屋大学博物館コンサート「魅惑の歌声」を開催しました。

今回は、井原妙子氏(ソプラノ)、井原義則氏(テノール)、小栗多香子氏(ピアノ伴奏)の3名によって、シュベルトの「鱒」、Rシュトラウスの「葵」、「歌劇ほうすけ



コンサートの様子

のひよこ(林 光作曲、谷川俊太郎作詞)」など全9曲が館内に響きわたりました。アンプを通さない生の歌声は、集まった聴衆を魅惑の世界に引きこみ、心の奥に響く心地良い、あつという間のひとときに274名の聴衆は酔いしれました。

また、今回は、同館で開催している企画展「めだかの学校」にちなみ、文部省唱歌「めだかの学校」を全員で合唱しました。聞くだけでなく自ら声を出したことにより、ひと味違ったコンサートとなりました。

当館は1969年に建築された(設計:谷口吉郎)建物で、演奏会場となる展示室は、吹き抜けによる大きな空間と印象的な折板屋根が、良い響きと適度な残響があり、毎回演奏者にもコンサートに向いているとの好評を得ています。次回は、5月30日(土)に第61回博物館コンサート「宇宙からのメッセージ」を開催します。

## 坂田記念 KMI ワークショップを開催

### ●素粒子宇宙起源研究機構

素粒子宇宙起源研究機構(KMI)は、3月3日(火)から6日(金)の間、理学南館坂田・平田ホールにおいて、坂田記念KMIワークショップ「質量の起源と強結合ゲージ理論」(SCGT15)を開催しました。85名の参加者のうちハーバード大学のハワード・ジョージアイ博士など著名な研究者を多数含む20名が海外から参加しました。

質量の起源を担うヒッグス粒子が発見されましたが、この粒子自身の質量の起源は「標準模型」では謎のままであり、その性質を解き明かすためにより基本的な理論が探求

されています。複合ヒッグス模型はその1つであり、同機構長である益川敏英特別教授らの強結合ゲージ理論の研究に基づいて山脇幸一 KMI 特任教授らによって1986年に提唱された「ウォーキングテクニカラー模型」について、現在世界中で計算機シミュレーションによる研究が進行しています。KMIはこの理論における複合ヒッグス粒子の候補を計算機シミュレーションで世界に先駆けて観測し、それを海外の有力グループが追認するなど、世界的なイニシアティブをとっています。

ワークショップでは計算機シミュレーションの成果発表を中心に、この理論の基本的性格についての考察、他の複合ヒッグス模型の模型構築やLHCでの実験的検証の可能性などについても幅広く議論されました。今年再開されるLHC実験に向けて理論面での大きな進展が見られたワークショップでした。

ワークショップの詳細は以下アドレスからご覧いただけます。

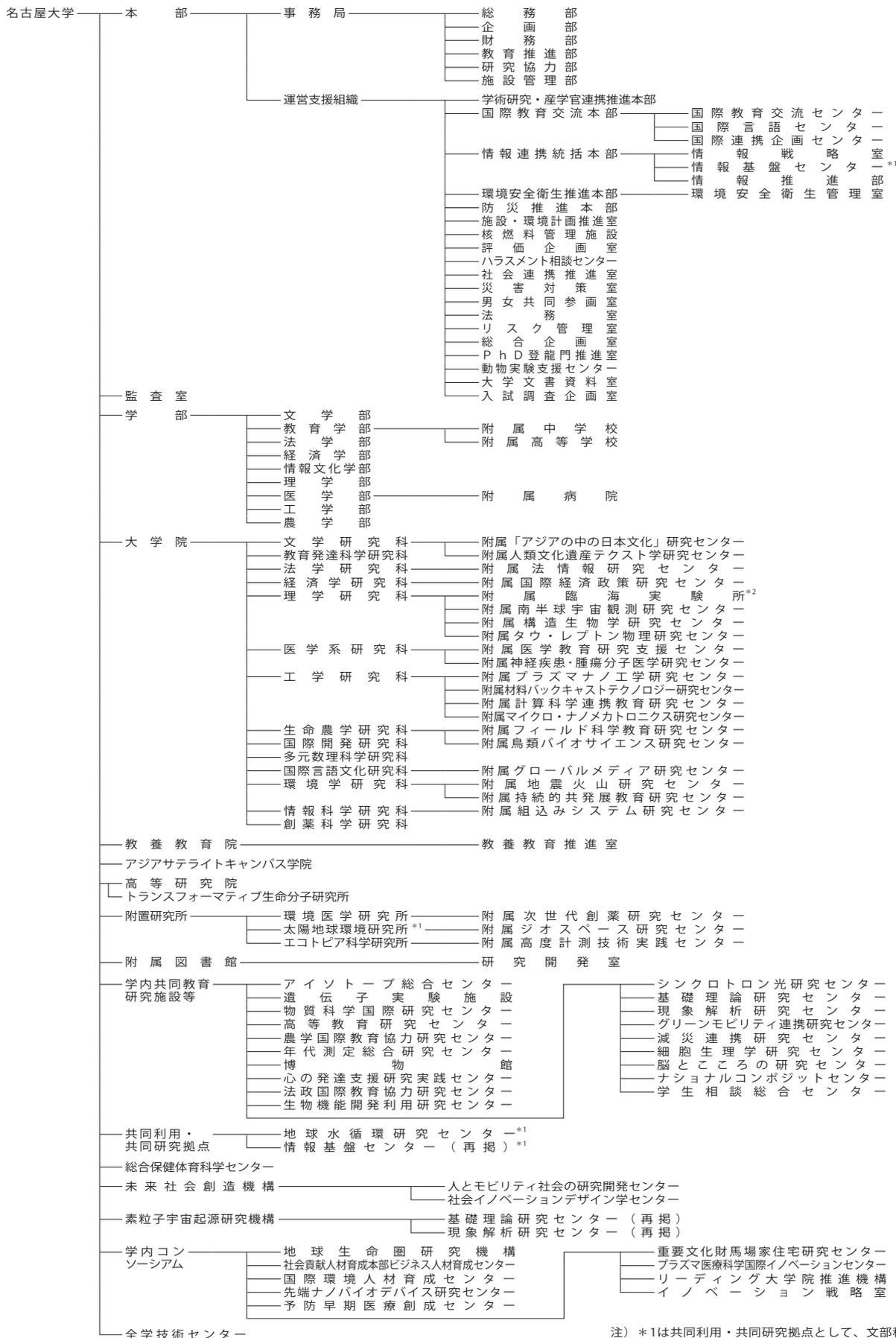
<http://www.kmi.nagoya-u.ac.jp/workshop/SCGT15/>



記念撮影

# 平成27年度名古屋大学組織図

平成27年 4月 1日



## 新任役員等の紹介

### ●理事・副総長（研究・学生担当）

國枝 秀世  
(くにえだ ひでよ)



専門分野：高エネルギー天文学

#### 〈略歴〉

昭和54年1月 名古屋大学理学部助手  
平成5年10月 名古屋大学理学部助教授  
平成8年4月 名古屋大学大学院理学研究科助教授  
平成11年9月 宇宙科学研究所宇宙圏研究系教授  
平成15年10月 宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究本部  
高エネルギー天文学研究系教授  
平成17年4月 名古屋大学大学院理学研究科教授  
平成18年4月 名古屋大学大学院理学研究科  
附属南半球宇宙観測研究センター教授  
平成20年4月 名古屋大学大学院理学研究科副研究科長  
平成21年4月 名古屋大学大学院理学研究科長・理学部長  
平成24年4月 名古屋大学副総長（研究・学生支援関係担当）  
平成25年4月 名古屋大学理事（研究・学生支援・入試関係担当）・  
副総長  
平成27年4月 名古屋大学理事（研究・学生担当）・副総長

### ●理事・副総長（国際・広報担当）

渡辺 芳人  
(わたなべ よしひと)



専門分野：生物無機化学、生体機能関連化学

#### 〈略歴〉

昭和57年4月 米国ミシガン大学博士研究員（化学科）  
昭和60年12月 米国プリンストン大学主任研究員（化学科）  
昭和62年3月 慶應義塾大学医学部助手  
昭和62年12月 慶應義塾大学医学部講師  
平成元年4月 通商産業技官  
平成2年10月 京都大学工学部助教授  
平成6年10月 岡崎国立共同研究機構分子科学研究所教授  
平成13年2月 岡崎国立共同研究機構統合バイオサイエンスセンター教授  
平成14年4月 名古屋大学大学院理学研究科教授  
平成16年4月 名古屋大学総長補佐（資源配分担当）  
平成17年4月 名古屋大学総長補佐（財務担当）  
平成17年8月 名古屋大学総長補佐（財務・広報担当）  
平成17年8月 名古屋大学広報室長  
平成18年4月 名古屋大学総長補佐（総務・広報担当）  
平成18年11月 名古屋大学物質科学国際研究センター教授  
平成21年4月 名古屋大学副総長（研究・国際企画関係担当）  
平成23年4月 名古屋大学副総長（研究・国際企画関係担当）  
平成24年4月 名古屋大学理事（国際・広報・社会連携関係担当）・  
副総長  
平成26年4月 名古屋大学理事（国際・広報・社会連携関係担当）・  
副総長  
平成27年4月 名古屋大学理事（国際・広報担当）・副総長

### ●理事・副総長（総務・教育・組織改革・学術情報基盤担当）

松下 裕秀  
(まつした ゆうしゅう)



専門分野：高分子材料科学

#### 〈略歴〉

昭和57年4月 名古屋大学工学部助手  
昭和62年8月 名古屋大学工学部講師  
平成6年1月 名古屋大学工学部助教授  
平成6年7月 東京大学物性研究所助教授  
平成11年4月 名古屋大学大学院工学研究科教授  
平成16年4月 名古屋大学総長補佐（目標・評価担当）  
平成16年5月 名古屋大学評価情報分析室長  
平成16年10月 名古屋大学評価企画室長  
平成19年4月 名古屋大学副総長（評価・総合企画関係担当）  
平成19年4月 名古屋大学総合企画室長  
平成24年4月 名古屋大学大学院創薬科学研究科長  
平成25年4月 名古屋大学大学院工学研究科長・工学部長  
平成27年4月 名古屋大学理事（総務・教育・組織改革・学術情報基盤  
担当）・副総長

### ●理事・副総長（法務・人権・リスク管理・内部統制担当）

市橋 克哉  
(いちはし かつや)



専門分野：行政法

#### 〈略歴〉

昭和58年4月 名古屋大学法学部助手  
昭和59年4月 名古屋大学法学部助教授  
平成3年4月 名古屋大学法学部教授  
平成11年4月 名古屋大学大学院法学研究科教授  
平成16年4月 名古屋大学総長補佐（法人化法規担当）  
平成17年4月 名古屋大学総長補佐（法人化担当）  
平成18年4月 名古屋大学総長補佐（法人法規・個人情報管理担当）  
平成19年4月 名古屋大学大学院法学研究科副研究科長  
平成21年4月 名古屋大学総長補佐（人事労務・人権（苦情処理）担当）  
平成22年4月 名古屋大学総長補佐（人事労務担当）  
平成22年4月 名古屋大学法政国際教育協力研究センター長  
平成25年4月 名古屋大学副総長（法務・リスク管理・人権関係担当）  
平成27年4月 名古屋大学理事（法務・人権・リスク管理・内部統制担当）・  
副総長

## 新任役員等の紹介

### ●理事・副総長（財務・施設整備担当）

木村 彰吾  
(きむら しょうご)



専門分野：管理会計

#### 〈略歴〉

平成2年4月 名古屋大学経済学部助手  
 平成4年4月 名古屋大学大学院経済学研究科研究生  
 平成5年4月 椋山女学園大学講師  
 平成9年4月 椋山女学園大学助教授  
 平成11年4月 名古屋大学経済学部助教授  
 平成12年4月 名古屋大学大学院経済学研究科助教授  
 平成16年4月 名古屋大学大学院経済学研究科教授  
 平成18年4月 名古屋大学総長補佐（財務担当）  
 平成20年8月 名古屋大学大学院経済学研究科副研究科長  
 平成24年4月 名古屋大学大学院経済学研究科長・経済学部長  
 平成26年4月 名古屋大学大学院経済学研究科  
 附属国際経済政策研究センター長  
 平成26年7月 名古屋大学総長補佐（基金担当）  
 平成27年4月 名古屋大学理事（財務・施設整備担当）・副総長

### ●理事（人事労務・環境安全・事務統括担当）・事務局長

竹下 典行  
(たけした のりゆき)



#### 〈略歴〉

昭和55年4月 文部省大学局教職員養成課  
 昭和58年5月 外務省情報文化局文化第一課  
 昭和60年4月 文部省学術国際局国際学術課企画調査係長  
 昭和61年4月 富山県総務部学術国際課副主幹  
 昭和62年7月 富山県総務部県立大学創設準備室主幹  
 平成元年4月 富山県企画県民部婦人青少年課長  
 平成3年4月 文部省学術国際局研究機関課課長補佐  
 平成4年10月 文部省高等教育局企画課課長補佐  
 平成6年7月 文化庁文化財保護部伝統文化課文化財保護企画室長  
 平成8年7月 厚生省生活衛生局食品保健課新開発食品保健対策室長  
 平成10年7月 文部省生涯学習局青少年教育課長  
 平成12年4月 大阪外国語大学事務局長  
 平成13年7月 文部科学省初等中等教育局教職員課長  
 平成16年7月 文部科学省生涯学習政策局社会教育課長  
 平成17年4月 文化庁文化芸術文化課長  
 平成18年4月 文化庁長官官房政策課長  
 平成19年4月 政策研究大学院大学大学運営局長  
 平成21年4月 政策研究大学院大学理事  
 平成21年8月 横浜国立大学理事・事務局長  
 平成24年8月 名古屋大学理事・事務局長  
 平成27年4月 名古屋大学理事（人事労務・環境安全・事務統括担当）・事務局長

### ●理事（大学運営担当）

郷 通子  
(ごう みちこ)



専門分野：生物物理学、進化生物学、生命情報学

#### 〈略歴〉

昭和48年12月 九州大学理学部助手  
 平成元年4月 名古屋大学理学部教授  
 平成8年4月 名古屋大学大学院理学研究科教授  
 平成15年4月 長浜バイオ大学バイオサイエンス学部長・教授  
 平成17年4月 お茶の水女子大学学長  
 平成21年4月 情報・システム研究機構理事（非常勤）  
 平成27年4月 名古屋大学理事（大学運営担当）

### ●副総長（学術研究・産学官担当）

財満 鎮明  
(ざいま しげあき)



専門分野：薄膜・表面界面物性、応用物性、結晶工学、電子デバイス・電子機器

#### 〈略歴〉

昭和57年4月 豊橋技術科学大学工学部助手  
 昭和61年8月 名古屋大学工学部講師  
 平成元年3月 名古屋大学工学部助教授  
 平成2年9月 オランダ物質基礎研究所客員研究員  
 平成9年4月 名古屋大学先端技術共同研究センター教授  
 平成16年4月 名古屋大学大学院工学研究科教授  
 平成19年4月 名古屋大学総長補佐（研究推進担当）  
 平成19年4月 名古屋大学研究推進室長  
 平成24年4月 名古屋大学総長補佐（産学官連携担当）  
 平成24年4月 名古屋大学産学官連携推進本部副本部長  
 平成25年4月 名古屋大学高等研究院副院長  
 平成26年1月 学術研究・産学官連携推進本部副本部長  
 平成26年5月 名古屋大学社会貢献人材育成本部副本部長  
 平成27年4月 名古屋大学副総長（学術研究・産学官担当）

## 新任役員等の紹介

### ●副総長（評価・総合企画担当）

前島 正義  
(まえしま まさよし)



専門分野：生化学・植物分子細胞生物学

〈略歴〉

昭和59年3月 カリフォルニア大学サンタクルーズ校  
ポストドクトラルフェロー  
昭和59年12月 名古屋大学農学部助手  
昭和63年4月 北海道大学低温科学研究所助手  
平成2年4月 北海道大学低温科学研究所助教授  
平成6年4月 名古屋大学農学部助教授  
平成11年4月 名古屋大学大学院生命農学研究科助教授  
平成13年7月 名古屋大学大学院生命農学研究科教授  
平成23年4月 名古屋大学大学院生命農学研究科副研究科長  
平成24年4月 名古屋大学大学院生命農学研究科長・農学部長  
平成27年4月 名古屋大学副総長（評価・総合企画担当）

### ●副総長（入試・組織改革・学生支援・図書館担当）

木俣 元一  
(きまた もとかず)



専門分野：西洋中世美術史

〈略歴〉

昭和62年5月 名古屋大学文学部助手  
平成3年10月 名古屋大学文学部助教授  
平成12年4月 名古屋大学大学院文学研究科助教授  
平成15年5月 名古屋大学大学院文学研究科教授  
平成18年4月 名古屋大学総長補佐（教育・研究推進担当）  
平成19年4月 名古屋大学大学院文学研究科副研究科長  
平成21年1月 名古屋大学高等教育研究センター長  
平成21年4月 名古屋大学総長補佐（評価担当）  
平成24年4月 名古屋大学大学院文学研究科長・文学部長  
平成27年4月 名古屋大学副総長（入試・組織改革・学生支援・図書館担当）

## 受賞者一覧

### 教員

受賞日	受賞名	受賞者の所属・職名	受賞者	備考
H26. 9. 4	平成25年 電気学会 電子・情報・システム部門技術委員会奨励賞	エコトピア科学研究所 寄附研究部門助教	真鍋 勇介	
H26. 9. 9	Certificate of Award for Encouragement of Research in IUMRS-ICA 2014	グリーンモビリティ連携研究センター助教	原田 俊太	
H26. 9.15	Mukaiyama Award Year 2015	トランスフォーマティブ生命分子研究所教授	山口 茂弘	
H26. 9.18	情報処理学会 シニア会員	大学院情報科学研究科 准教授	井手 一郎	
H26.10. 7	Best Paper Awards Finalists (5/800), The 2014 IEEE International Conference on Systems, Man, and Cybernetics	未来社会創造機構特任助教	左 毅	
H26.12.10	第10回（2014年度）商事法務研究会賞	大学院法学研究科准教授	西井 志織	
H26.12.16	日本心理学会第78回学術大会 優秀発表賞	大学院環境学研究科研究員 日本学術振興会特別研究員 (PD)	渡邊 言也	
H26.12.19	科学技術への顕著な貢献2014 (ナイスステップな研究者)	トランスフォーマティブ生命分子研究所教授	東山 哲也	
H26.12.20	IEEE Nagoya Section Young Researcher Award	大学院工学研究科講師	新津 葵一	
H26.12.24	Stefan Bergman Prize	大学院多元数理科学研究科 教授	大沢 健夫	
H26.12.25	The Swiss Chemical Society Lectureship Award	トランスフォーマティブ生命分子研究所教授	伊丹健一郎	
H27. 1. 9	Award for Encouragement of Research in The 24th Annual Meeting of MRS-J	大学院工学研究科助教	亀山 達矢	
H27. 1.11	新学術領域「共感性の進化・神経基盤」第2回領域会議 若手優秀発表賞	環境医学研究所研究員	山下 哲	

## 受賞者一覧

受賞日	受賞名	受賞者の所属・職名	受賞者	備考
H27. 1.14	Thieme Chemistry Journals Award 2015	大学院工学研究科准教授	波多野 学	
H27. 1.16	愛知県若手研究者イノベーション創出奨励事業 第9回「わかしゃち奨励賞」最優秀賞	グリーンモビリティ連携 研究センター助教	原田 俊太	
H27. 1.19	JPSJ Papers of Editors' Choice	大学院理学研究科助教	出口 和彦	佐藤憲昭（大学院理学研究科教授）、 井村敬一郎（大学院理学研究科助教）と 連名
H27. 1.21	第12回クリティカルソフトウェア ワークショップ優秀賞	情報連携統括本部 情報戦略室教授	山本修一郎	
H27. 1.24	2014年度計測自動制御学会中部支部 奨励賞	未来社会創造機構特任助教	山口 拓真	
H27. 1.30	MBL Research Award 2014	大学院理学研究科教授	五島 剛太	
H27. 1.30	Young Investigator Award, T-cell Lymphoma Forum 2015	医学部附属病院助教	佐藤 啓	
H27. 1.30	愛知県学術顕彰	大学院工学研究科教授	天野 浩	
H27. 1.30	名古屋学術表彰	大学院工学研究科教授	天野 浩	
H27. 1.30	第6回丸山記念研究奨励賞	物質科学国際研究センター	齊藤 尚平	
H27. 2. 4	第7回（2015年度）井上リサーチアワード	大学院工学研究科助教	ウヤヌク ムハメッド	
H27. 2. 4	第31回（2014年度）井上学術賞	トランスフォーマティブ 生命分子研究所客員教授	鳥居 啓子	
H27. 2.13	平成26年度電気化学会東海支部 若手研究者特別賞	大学院工学研究科助教	本山 宗主	
H27. 2.19	2014年有機合成化学協会 武田薬品工業 研究企画賞	物質科学国際研究センター 助教	村上 慧	
H27. 2.19	平成26年度有機合成化学協会賞	大学院工学研究科教授	西山 久雄	
H27. 2.19	平成26年度有機合成化学奨励賞	大学院工学研究科准教授	三宅 由寛	
H27. 2.24	第11回（平成26年度）日本学術振興会賞	大学院生命農学研究科 准教授	佐藤 豊	
H27. 2.27	平成26年度日本エネルギー学会進歩賞 （学術部門）	大学院工学研究科准教授	義家 亮	
H27. 2.27	平成26年度日本エネルギー学会進歩賞 （学術部門）	大学院工学研究科助教	神田 英輝	
H27. 2.27	平成26年度江野科学振興財団 田中ゴム科学技術賞	大学院工学研究科助教	野呂 篤史	
H27. 3. 1	平成26年度日本化学会 第64回進歩賞	物質科学国際研究センター	齊藤 尚平	
H27. 3. 6	永井科学技術財団 第32回永井学術賞	エコトピア科学研究所 准教授	坂本 渉	
H27. 3. 6	永井科学技術財団 第32回永井学術賞	大学院工学研究科准教授	安田 啓司	
H27. 3.13	第64期（2014年度）日本機械学会東海支部賞 研究賞	大学院工学研究科准教授	上坂 裕之	

## 学生

受賞日	受賞名	受賞者の所属・学年	受賞者	備考
H26. 9. 2	第30回ファジィシステムシンポジウム ポスター・デモセッション優秀賞	大学院工学研究科 D1	ジメネス フェリックス	
H26. 9.10	日本セラミックス協会 第27回秋季シンポジウム 特定セッション「先進的な構造科学と新物質開拓 ～世界結晶年記念～」 優秀ポスター発表賞	大学院工学研究科 M2	杉浦 銀治	
H26. 9.17	化学工学会 第46回（平成26年度）バイオ部会 学生ポスター発表会 優秀ポスター賞	大学院工学研究科 D3	佐々木寛人	
H26. 9.18	精密工学会 2014年度秋季大会学術講演会 ベストプレゼンテーション賞	大学院工学研究科 D2	青木 友弥	
H26.10.14	第63回高分子討論会 優秀ポスター賞	大学院理学研究科 M2	森 千草	
H26.10.18	第87回日本生化学会大会 若手優秀発表賞	大学院生命農学研究科 D3	小川 拓哉	
H26.10.18	日本混相流学会 混相流シンポジウム2014 学生優秀講演賞	大学院工学研究科 M1	山下 雅稔	
H26.11. 9	日本アミノ酸学会第8回学術大会 銀賞	大学院生命農学研究科 M1	石川 卓弥	
H26.11.19	日本賃貸住宅管理協会 第5回JPM学生コンテスト アットホーム賞	工学部研究生	鈴木 翔太	神谷亮賢（工学部研究生）と連名
H26.11.21	Plasma Conference 2014 若手優秀発表賞	大学院工学研究科 M2	萩原 敏哉	
H26.11.28	2014年第5回スクリーニング学研究会 最優秀ポスター賞	大学院創薬科学研究科 M1	藤谷 将也	
H26.11.28	第49回地盤工学研究発表会 優秀論文発表者賞	大学院工学研究科 D3	吉川 高広	
H26.11.28	第49回地盤工学研究発表会 優秀論文発表者賞	大学院工学研究科 M2	小川 大貴	
H26.11.28	第49回地盤工学研究発表会 優秀論文発表者賞	大学院工学研究科 M1	水野 元陽	

## 受賞者一覧

受賞日	受賞名	受賞者の所属・学年	受賞者	備考
H26.11.29	第41回有機典型元素化学討論会 優秀講演賞	大学院理学研究科 D2	松尾 恭平	
H26.11.29	第41回有機典型元素化学討論会 優秀ポスター賞	大学院理学研究科 M2	安藤 直紀	
H26.12. 6	2014年度日本生態学会中部地区大会 ポスター賞	大学院生命農学研究科 M2	西村 朋也	梶村 恒 (大学院生命農学研究科准教授)、 他 1 名と連名
H26.12. 8	高分子学会 第45回中部化学関係学協会 支部連合秋季大会 東海高分子優秀学生発表賞	大学院工学研究科 M2	宮瀬 晴子	
H26.12.10	Best Poster Award, 14th Asia-Pacific International Symposium on Microscale Separations and Analysis (APCE2014)	大学院工学研究科 M2	小中出侑樹	安井隆雄 (大学院工学研究科助教)、 加地範匡 (大学院工学研究科准教授)、 湯川 博 (革新ナノバイオデバイス研究 センター特任講師)、馬場嘉信 (大学院 工学研究科教授) と連名
H26.12.11	Outstanding Paper Award, 2014 IEEE International Conference on Industrial Engineering and Engineering Management	大学院情報科学研究科 D1	呉 偉	柳浦睦憲 (大学院情報科学研究科教授)、 他 2 名と連名
H26.12.11	日本溶媒抽出学会 第33回溶媒抽出討論会 ポスター優秀賞	大学院工学研究科 M1	平山 幹朗	
H26.12.11	第18回パターン認識・メディア理解研究会 アルゴリズムコンテスト 最優秀賞	大学院情報科学研究科 D1	原 健翔	他 4 名と連名
H26.12.11	第18回パターン認識・メディア理解研究会 アルゴリズムコンテスト 優秀賞	大学院情報科学研究科 M2	加藤 光佑	谷繁龍之介 (大学院情報科学研究科 M2)、 鈴木悠暉 (大学院情報科学研究科 M1)、 児玉悠貴 (大学院情報科学研究科 M1)、 他 1 名と連名
H26.12.12	Best Poster Award, IEEE International Symposium on Multimedia (ISM 2014)	大学院情報科学研究科 M2	汪 雪婷	平山高嗣 (大学院情報科学研究科特任 准教授)、間瀬健二 (大学院情報科学 研究科教授)、他 1 名と連名
H26.12.12	資源・素材学会関西支部 優秀発表賞	大学院工学研究科 M2	山岡 啓一	神本祐樹 (グリーンモビリティ連携研究 センター特任講師)、市野良一 (エコトピア 科学研究所教授) と連名
H26.12.12	電気学会マグネティックス技術委員会 研究奨励賞	大学院工学研究科 M2	根来 翼	
H26.12.17	第15回計測自動制御学会 システムインテグ レーション部門講演会 (SI2014) 優秀講演賞	大学院工学研究科 D1	櫛田 陽平	原 進 (大学院工学研究科准教授) と連名
H26.12.18	公益財団法人トラスト未来フォーラム 第 2 回学生懸賞論文「信頼ある社会の構築に 向けた金融機関の果たす役割は何か？」第 1 等	経済学部 4 年	永島 大介	駒田祥也 (経済学部 4 年)、 徳舛祐治 (経済学部 4 年)、 深谷瑠璃 (経済学部 4 年) と連名
H26.12.20	第 8 回日本テスト学会大会発表賞	大学院教育発達科学研究科 M1	寺尾 尚大	石井秀宗 (大学院教育発達科学研究科 准教授)、他 1 名と連名
H26.12.20	第14回日本表面科学会中部支部学術講演会 講演奨励賞	大学院工学研究科 M2	今井 雅人	
H26.12.20	第45回中部化学関係学協会支部連合秋季大会 有機化学一般研究発表 優秀賞	大学院工学研究科 D1	山下 賢二	水野麻依 (大学院工学研究科 M1)、 波多野学 (大学院工学研究科准教授)、 石原一彰 (大学院工学研究科教授) と連名
H26.12.20	第45回中部化学関係学協会支部連合秋季大会 有機化学一般研究発表 優秀賞	大学院工学研究科 M2	芹澤 祐真	
H26.12.20	第45回中部化学関係学協会支部連合秋季大会 有機化学一般研究発表 優秀賞	大学院工学研究科 M1	川岸 真友	
H26.12.24	2014年度日本社会心理学会若手研究者奨励賞	大学院教育発達科学研究科 D3	平島 太郎	
H26.12.24	2014年度日本社会心理学会若手研究者奨励賞	大学院教育発達科学研究科 D1	玉井 颯一	
H26.12.24	2014年度日本社会心理学会若手研究者奨励賞	大学院教育発達科学研究科 M2	白木 優馬	
H26.12.24	SCIS & ISIS 2014 Best Student Presentation Award, Joint 7th International Conference on Soft Computing and Intelligent Systems and 15th International Symposium on Advanced Intelligent Systems)	大学院工学研究科 D1	ジメネス フェリックス	
H27. 1. 8	IGER Annual Meeting 2014 Poster Award, 名古屋大学大学院 博士課程教育リーディング プログラム グリーン自然科学国際教育研究 プログラム	大学院工学研究科 D2	小倉 義浩	
H27. 1.10	第 2 回 (2014年度) 応用物理学会東海支部 学術講演会発表奨励賞	大学院工学研究科 D2	浅野 孝典	
H27. 1.10	第 2 回 (2014年度) 応用物理学会東海支部 学術講演会発表奨励賞	大学院工学研究科 M2	伊藤慎太郎	

## 受賞者一覧

受賞日	受賞名	受賞者の所属・学年	受賞者	備考
H27. 1.10	第2回(2014年度)応用物理学会東海支部 学術講演会 発表奨励賞	大学院工学研究科 M1	高原 渉	
H27. 1.10	第2回(2014年度)応用物理学会東海支部 学術講演会 発表奨励賞	大学院工学研究科 M1	藤本 亮祐	
H27. 1.19	日本経済新聞社 テクノルネサンスジャパン 第7回東レ賞 最優秀賞	工学部4年	山田 貴之	
H27. 1.20	2014年度日本地震学会学生優秀発表賞	大学院環境学研究科 M2	横井 大輝	
H27. 1.20	電気学会東海支部 電気学会優秀論文発表賞	大学院工学研究科 M1	松本 和也	真鍋勇介(エコトピア学研究所寄附研究 部門助教)、栗本宗明(大学院工学研究科 助教)、加藤丈佳(大学院工学研究科 准教授)、舟橋俊久(エコトピア研究所寄 附研究部門教授)、鈴置保雄(大学院工学研究 科教授)と連名
H27. 1.20	電気学会東海支部 電気学会優秀論文発表賞	大学院工学研究科 M1	山下 優	栗本宗明(大学院工学研究科助教)、 加藤丈佳(大学院工学研究科准教授)、 舟橋俊久(エコトピア研究所寄附研究部 門教授)、鈴置保雄(大学院工学研究科教授) と連名
H27. 1.22	電子情報通信学会 有機デバイス・材料研究討論会 有機エレクトロニクス 優秀研究発表賞	大学院工学研究科 M2	原田 知典	伊東 裕(大学院工学研究科准教授)、 田中久暁(大学院工学研究科助教)、 黒田新一(大学院工学研究科教授)と連名
H27. 1.26	軽金属学会 平成26年度軽金属希望の星賞	大学院工学研究科 M2	疋田 和樹	
H27. 1.27	電気・電子・情報関係学会東海支部連合大会 奨励賞	大学院情報科学研究科 M1	井上 卓弥	平山高嗣(大学院情報科学研究科特任准教授)、 井手一郎(大学院情報科学研究科准教授)、 村瀬 洋(大学院情報科学研究科教授)、 他2名と連名
H27. 1.31	日本古生物学会第164回例会 優秀ポスター賞	大学院環境学研究科 M2	河合 巧幾	
H27. 2. 5	高エネルギー加速器研究機構 第29回「放射線検出器とその応用」研究会 ショートオーラル発表 研究会奨励賞	大学院工学研究科 M1	中山陽一郎	
H27. 2. 7	第3回大東建託 賃貸住宅コンペ「40年後の 未来の賃貸住宅」審査委員特別賞	工学部研究生	鈴木 翔太	神谷 亮賢(工学部研究生)と連名
H27. 2.23	第8回「未来を強くする子育てプロジェクト」 スミセイ女性研究者奨励賞	大学院文学研究科 D3	神谷 貴子	
H27. 3. 1	微生物レファレンスセンター研究集会2015 (MRC2015) 若手優秀講演賞	大学院環境学研究科 M2	加藤 悠爾	
H27. 3. 3	第7回データ工学と情報マネジメントに関する フォーラム(DEIM 2015) 学生プレゼンテーション賞	大学院情報科学研究科 M2	築井 美咲	
H27. 3. 6	平成26年度理学研究科物質理学専攻(化学系) 博士前期課程 優秀学位論文賞	大学院理学研究科 M2	吉村 柁彦	
H27. 3. 7	日本オペレーションズ・リサーチ学会中部支部 第42回研究発表会 学生論文賞最優秀賞	大学院情報科学研究科 M2	木村 卓哉	
H27. 3. 7	日本オペレーションズ・リサーチ学会中部支部 第42回研究発表会 学生論文賞優秀賞	大学院情報科学研究科 M2	林 大晃	
H27. 3. 7	日本オペレーションズ・リサーチ学会中部支部 第42回研究発表会 学生論文賞優秀賞	工学部4年	長谷 陽平	今堀 慎治(大学院工学研究科准教授)と 連名
H27. 3. 9	電子情報通信学会東海支部 平成26年度卒業研究発表会ポスター発表部門 最優秀卒業研究発表賞	工学部4年	岸上 利裕	
H27. 3. 9	電子情報通信学会東海支部 平成26年度卒業研究発表会ポスター発表部門 優秀卒業研究発表賞	工学部4年	月岡 晋吾	
H27. 3. 9	電子情報通信学会東海支部 平成26年度卒業研究発表会口頭発表部門 優秀卒業研究発表賞	工学部4年	不破 力	
H27. 3.10	日本知能情報ファジィ学会 第3回人間共生システムデザインコンテスト 2015 インタラクティブ賞	大学院工学研究科 D1	ジメネス フェリックス	吉川大弘(大学院工学研究科准教授)、 古橋 武(大学院工学研究科教授) と連名
H27. 3.10	FSE 2015 Best Paper Award	大学院工学研究科 M2	丹羽 裕一	岩田 哲(大学院工学研究科准教授) 他2名と連名
H27. 3.12	2015年電子情報通信学会 総合大会 ISS 特別企画「学生ポスターセッション」 優秀ポスター賞	大学院工学研究科 M1	加藤さやか	

\*受賞者の所属・職名又は学年は、受賞当時

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成27年2月16日～3月15日]

記事	年月日	新聞等名
1 備える3.11から：第111回想定シリーズ②地震と土砂災害 中野正樹工学研究科教授が解説	2.16 (月)	中日 (朝刊)
2 ラボ通信：幼植物に接ぎ木 可能に 新田英之理学研究科特任講師	2.16 (月)	読売
3 アジアものづくりサミット：16、17日 2日目に濱口総長が特別講演、1日目にトヨタ自動車株式会社代表取締役会長内山田竹志氏本学卒業生が基調講演を行う	2.16 (月) 2.17 (火) 2.18 (水) 3. 9 (月)	日経 (朝刊) 中日 (朝刊) 日経 (朝刊) 中日 (朝刊) 中日 (朝刊) 日経 (朝刊)
4 耕論：体育で何を鍛えるか 非科学的な指導が事故を招く 内田 良教育発達科学研究科准教授	2.17 (火)	朝日 (朝刊)
5 いまドキッ！大学生：ギャラリー 新たな活用 教養教育院のプロジェクトギャラリー「clas (クラス)」について「博物館実習」の授業を持つ栗田秀法文学研究科教授は「白い壁のある部屋がなく、授業で扱うには手頃な広さ」と語り、茂登山清文情報科学研究科教授は「専門にかかわる芸術系の知識も身に付けてほしい」と語る	2.17 (火)	中日 (朝刊)
6 第30回博物館企画展めだかの学校ーメダカ先生 (山本時男) と名古屋大学のメダカ研究ー特別講演会「メダカ先生：山本時男備忘録と養虫山人」開催：28日 宗宮弘明本学名誉教授が講演	2.17 (火)	中日 (朝刊)
7 テクノルネサンスジャパン第7回企業に研究開発してほしい未来の夢アイデア・コンテスト 募集テーマ 東レの先端素材を用いた新しい商品の企画大募集！：最優秀賞「つぶれる帽子 with カーボンファイバー」山田貴之さん工学部4年生	2.17 (火)	日経 (朝刊)
8 伊丹健一郎トランスフォーマティブ生命分子研究所教授らはグラフェンのナノメートルサイズの極小パーツを市販の化合物から容易に作り出す技術を開発	2.17 (火) 2.18 (水)	中日 (朝刊) 日刊工業
9 愛知県は県公立大学法人新理事長に鮎京理事を選出	2.18 (水)	中日 (朝刊) 他2社
10 この人：「はやぶさ2」の科学調査を統括 渡邊誠一郎環境学研究科教授	2.18 (水)	中日 (朝刊)
11 生物機能開発利用研究センター長に中園幹生生命農学研究科教授、ナショナルコンポジットセンター長に佐宗章弘工学研究科教授を選出	2.18 (水)	中日 (朝刊)
12 日経実力病院調査 医出づる国：脳腫瘍と肝臓がんの実力病院 医学部附属病院の治療実績等が取り上げられる	2.18 (水)	日経 (朝刊)
13 3年前に任命された福和伸夫減災連携研究センター教授に続き、廣井 悠同准教授、田代 喬同寄附研究部門准教授が愛知県警の「災害対策アドバイザー」に任命された	2.19 (木)	中日 (朝刊)
14 古くて新しいモノ、コト、ヒト⑩：理論の追及 空想併せ 益川敏英本学特別教授	2.19 (木)	毎日 (朝刊)
15 読売新聞講座：法学研究科「比較アジア社会論」レー・ティ・キム・オアインさん法学研究科博士課程2年生の受講の感想	2.19 (木)	読売
16 上出洋介本学名誉教授の業績をたたえ、アジア・大洋州地球科学学会が「カミデ賞」を創設	2.19 (木)	毎日 (朝刊)
17 本学や国立天文台、大阪教育大学などは新星爆発で元素のリチウムが大量生成されているのを発見	2.19 (木)	中日 (朝刊)
18 工学部・工学研究科/情報科学研究科/環境学研究科の研究室をインターネット上で写真入りで紹介する『研究室図鑑』公開	2.20 (金)	中日 (朝刊)
19 第74回中日農業賞：講評 生源寺真一生命農学研究科教授	2.20 (金)	中日 (朝刊)
20 寺崎浩子医学系研究科教授と兼子裕規同助教などのグループはプラズマの粒子を照射した液体を目に注射することで加齢黄斑変性の症状を抑えることにマウスを使った実験で成功	2.20 (金)	科学新聞
21 内藤記念科学振興財団2014年内藤記念科学振興賞：近藤孝男理学研究科特任教授	2.20 (金)	科学新聞
22 叙位叙勲：従四位瑞宝中綬章 宮原 昭本学名誉教授	2.21 (土)	読売
23 戦後70年：太陽地球環境研究所豊川分室のある豊川海軍工廠跡地で見学会が開かれる	2.22 (日)	朝日 (朝刊)
24 朝日カルチャーセンター2015春学期新講座特集：宇宙の知りたいこと教えます 杉山 直理学研究科教授、図像学入門結婚の秘儀をめぐる奇跡 鈴木繁夫国際言語文化研究科教授、金剛般若経を読む 谷口富士夫本学非常勤講師	2.22 (日)	朝日 (朝刊)
25 あいち九条の会結成10周年の集い開催：21日 森 英樹本学名誉教授が講演	2.22 (日)	朝日 (朝刊)
26 深層断面：国立大学3分類 世界最高水準/専門性/地域貢献 国立大学のトップクラスといわれるグループとして本学が取り上げられる	2.23 (月)	日刊工業
27 皇太子さまが誕生日の記者会見で赤崎 勇本学特別教授、天野 浩工学研究科教授が青色LEDでノーベル物理学賞を受賞したことに触れ「地道な研究の積み重ねと大学、民間企業をはじめ多くの方々の支援と協力から生まれた」と語る	2.23 (月)	毎日 (朝刊)
28 第30回博物館企画展めだかの学校ーメダカ先生 (山本時男) と名古屋大学のメダカ研究ー開催：17日～5月9日	2.23 (月)	中日 (朝刊)
29 太陽地球環境研究所豊川分室のある豊川海軍工廠跡地で見学会 一部を豊川市が購入し平和公園を整備する方針と取り上げられる	2.23 (月)	朝日 (朝刊)
30 ひと 彩々：黒沼英明さん本学大学院生の国際交流基金派遣団としての取り組みが紹介される	2.24 (火)	中日 (朝刊)
31 日本経済団体連合会会長榊原定征氏本学卒業生は就職活動の解禁時期に関連し「会員企業に指針順守をお願いしている」と語る	2.24 (火)	読売
32 広角：①経団連ビジョン 豊かで活力ある日本へ 日本経済団体連合会会長榊原定征氏本学卒業生	2.24 (火)	日刊工業
33 高野雅夫環境学研究科教授は太陽光発電パネルで電力をまかなう「完全オフグリッドハウス」に人が住み、電力の消費量や効率などを調べる生活実験を始めた	2.24 (火)	中日 (夕刊)
34 本学と株式会社熊谷組などは橋をハンマーでたたいたときの音から強度を測る劣化診断ロボットの開発を開始し、測定用カメラが完成したと発表	2.24 (火)	中日 (朝刊)
35 濱口総長が文部科学省科学技術・学術審議会の第8期会長に選出された	2.25 (水)	日刊工業
36 森川高行未来社会創造機構教授は自身が座長を務めるリニア中央新幹線の検討会議が打ち出した名古屋ー豊田間の時間短縮のため名鉄三河線を複線化する考えについて「名古屋駅から各地域へ交通利便性を高めることが、リニア効果をより享受することになる」と語る	2.25 (水)	読売
37 名古屋市立大学病院が形成外科を開設し、鳥山和宏医学系研究科准教授が部長に就任	2.25 (水)	朝日 (朝刊) 中日 (朝刊)
38 日経実力病院調査 医出づる国：子宮がん治療の実力病院で医学部附属病院が取り上げられる	2.25 (水)	日経 (朝刊)
39 広角：②経団連ビジョン 民主導で2つの変革を 経済団体連合会会長榊原定征氏本学卒業生	2.25 (水)	日刊工業
40 国際ロータリー第2760地区大会開催：丹羽宇一郎本学名誉博士が講演	2.25 (水)	中日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成27年2月16日～3月15日]

記事	月日	新聞等名
41 本学で平成27年度一般入試が始まり渡辺理事は「国内外の優秀な学生を獲得するために国際化は避けて通れない」と語る	2.25 (水)	日経 (夕刊)
42 リレーおびにおん：捨ててこそ⑩「面白いと思えるか」だけ 大澤文夫本学名誉教授	2.25 (水)	朝日 (朝刊)
43 本学で平成27年度一般入試が始まり当日の様子が取り上げられる	2.25 (水)	朝日 (夕刊)
44 2015年チャールズ・スターク・ドレイパー賞受賞式：24日 赤崎 勇本学特別教授は受賞式を欠席	2.25 (水)	中日 (夕刊) 日経 (夕刊) 読売
45 「ノーベル・プライズ・ダイアログ・東京2015」開催：3月1日 天野 浩工学研究科教授が講演し当日の様子をインターネット動画配信サービス「ユーストリーム」で配信	2.25 (水) 3. 1 (日) 3. 2 (月)	日刊工業 日経 (朝刊) 読売 他5社
46 本学で平成27年度一般入試が始まりノーベル物理学賞を受賞した天野 浩工学研究科教授の影響で工学部で志願倍率がアップ	2.25 (水) 2.26 (木)	中日 (夕刊) 毎日 (夕刊) 読売
47 濱口総長が座長を務める「就職問題懇談会」はインターンシップで会社説明会や選考活動を行わないよう各大学が企業側に要請することを申し合わせた	2.26 (木)	読売 毎日 (夕刊)
48 本学の平成27年度一般入試出題分析 化学 生物 物理 世界史 日本史 地理 小論文 英語	2.26 (木)	中日 (朝刊)
49 広角：③経団連ビジョン 日本の強み 世界に発信 経済団体連合会会長榊原定征氏本学卒業生	2.26 (木)	日刊工業
50 本学の平成27年度一般入試出題分析 国語 数学	2.27 (金)	中日 (朝刊)
51 広角：④経団連ビジョン 原発問題 大局的視点で 経済団体連合会会長榊原定征氏本学卒業生	2.27 (金)	日刊工業
52 特集：今伝えたい東海地方のこれから 濱口総長 産業をリードする東海で日本の未来を支えるイノベーション人材を育成	2.28 (土)	朝日 (朝刊)
53 第480回中日懇話会開催：27日「21世紀を照らすLED」をテーマに天野 浩工学研究科教授が講演	2.28 (土) 3. 3 (火)	中日 (朝刊) 中日 (夕刊) 中日 (朝刊)
54 第74回中日農業賞贈呈式：27日 審査委員長 生源寺真一生命農学研究科教授	2.28 (土)	中日 (朝刊)
55 東海金融トップに聞く：三重銀行頭取種橋潤治氏本学卒業生	2.28 (土)	読売
56 探訪ラボ：太陽地球環境研究所 松見研究室 大気環境をより詳しく	3. 1 (日)	読売
57 病院の実力：膀胱・腎細胞がん 医学部附属病院の実績が取り上げられる	3. 1 (日)	読売
58 ドクター井口のほのぼのクリニック 92歳でも青春感じて 愛知淑徳大学教授井口昭久氏本学教授	3. 1 (日)	毎日 (朝刊)
59 味な提言：日本食 (和食) のすすめ① 中部大学教授横越英彦氏本学元助手	3. 1 (日)	中日 (朝刊)
60 スキャナー：就活短期化 企業走る 濱口総長は「(会社説明会解禁時期の) 繰り下げて海外留学や課外活動の時間にあてられる学生が増えた」と評価	3. 2 (月)	読売
61 2015年総合大会電子情報通信学会開催：12日 天野 浩工学研究科教授が講演	3. 2 (月)	日刊工業
62 高橋雅英医学系研究科教授などはがんの増殖にがん周辺の細胞の「ガーディン」というタンパク質が深く関わっていることを突き止めた	3. 3 (火) 3. 5 (木)	中日 (朝刊) 科学新聞
63 のよりサロン：「化学の魅力」つくり出す強い意志を 野依良治本学特別教授が本学学生と議論を交わす	3. 3 (火)	中日 (朝刊)
64 医学部附属病院が子宮頸がんワクチン接種後治療の協力医療機関の1つとして発表された	3. 3 (火) 3.13 (金)	朝日 (朝刊) 中日 (朝刊)
65 動き出す軍民両用研究⑩：研究者、技術に責任持て 池内 了本学名誉教授	3. 3 (火)	日経 (朝刊)
66 争論：文系学部で何を教える 蓄えた底力で危機乗り越える 日比嘉高文学研究科准教授	3. 4 (水)	朝日 (朝刊)
67 学びを語る：2分の1成人式 虐待児や多様な家族に配慮を 内田 良教育発達科学研究科准教授	3. 4 (水)	朝日 (朝刊)
68 発達支援研究実践センター長に金井篤子教育発達科学研究科教授、脳とこころの研究センター長に長縄慎二医学系研究科教授を選出	3. 4 (水)	中日 (朝刊)
69 益川敏英本学特別教授が「ぎふメディアコスモス」の名誉館長に就任すると発表	3. 4 (水) 3. 5 (木)	中日 (夕刊) 毎日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
70 廣井 悠減災連携研究センター准教授は南海トラフ巨大地震が発生すると、千葉から鹿児島までの22都府県で計約270件の津波火災が起きる可能性があるとの予想をまとめた	3. 5 (木)	朝日 (朝刊)
71 赤崎 勇本学特別教授が東日本大震災の被災地・宮城県気仙沼市の子ども達を励まそうと書いた色紙が、市立気仙沼小学校に届いた	3. 5 (木)	読売
72 附属図書館医学部分館ミニ展示会「建物に見る病院と医学校の歴史」開催：2月13日～5月29日	3. 5 (木)	読売
73 第55回名大カフェ "Science, and Me " 「白と黒の粒子からカラフルな色の材料をつくる」開催：12日 竹岡敬和工学研究科准教授が講演	3. 5 (木)	読売
74 災害に強い病院 着々 医学部附属病院など災害拠点病院を中心に愛知県内6病院が災害時に電子カルテを相互に共有できるネットワークを運用する「愛知メディカルBCPネットワーク」が取り上げられる	3. 5 (木)	日経 (夕刊)
75 本学が日本原子力研究開発機構と大阪大学、東京工業大学などが連携して取り組む原子力分野の人事教育のネットワークに参加	3. 6 (金)	日刊工業
76 ノーベル賞受賞者の小林 誠本学特別教授と筑波大学名誉教授白川英樹氏の特別授業が二松学舎大学附属高等学校で開かれた	3. 8 (日)	日経 (朝刊)
77 文武両道 効率で勝負 七原優介さん教育学部4年生	3. 9 (月)	日経 (朝刊)
78 本学公認サークルの宇宙開発チーム「NAFT (ナフト)」が4月10日に米国ミシガン州で開かれるスペースパレーンコンテストに初参加	3. 9 (月)	中日 (朝刊)
79 本学で一般入試前期日程の合格発表があり、1850人が合格した	3. 9 (月) 3.10 (火)	毎日 (夕刊) 他2社 読売
80 本学や東京大学、東京工業大学などは2種類のアゲハチョウのゲノムを解読し、毒のあるチョウに姿を変える「擬態」にかかわる遺伝子を発見	3.10 (火)	日経 (朝刊)

記事	月日	新聞等名
81 天野 浩工学研究科教授はLEDの技術を医療分野に広げる研究を進める計画を明らかにした	3.10 (火)	日経 (朝刊)
82 第13回坂田・早川記念レクチャー開催：14日 名古屋市科学館サイエンスホールで行われる	3.10 (火)	中日 (朝刊)
83 2014年度 永井科学技術財団：学術賞 坂本 渉エコトピア科学研究所准教授、安田啓司工学研究科准教授、奨励賞 江夏幾多郎経済学研究科准教授、研究奨励金 小山剛史工学研究科講師	3.10 (火)	中日 (朝刊)
84 震災の記憶を風化させない 南海トラフ地震防災への取り組み 護 雅史減災連携研究センター特任教授	3.11 (水)	日刊工業
85 戦後70年 祖父の体験談 胸に 戦後70年の節目に合わせて開設する「戦争に関する資料館」の学芸員として橋本紘希さん博士課程に奮闘	3.11 (水)	読売
86 時のおもりに「平和」の概念の変化 元の意味から遠ざかる 池内 了本学名誉教授	3.11 (水)	中日 (朝刊)
87 博物館スポット展示「海藻コレクションー津波にさらわれた8万点の標本」開催：10日～28日	3.11 (水)	朝日 (夕刊)
	3.12 (木)	読売
88 オープンレクチャー2015開催：21日 分子世界、難民問題など8のテーマで公開講座を行う	3.12 (木)	読売
89 なくそう子どもの貧困ネットワークあいち第12回連続学習会「子どもの貧困を解消するのは」講演とミニシンポジウム「子どもの貧困対策法・大綱は有効か？」開催：15日 講師 中嶋哲彦教育発達科学研究科教授	3.12 (木)	読売
90 笑顔：本学公認サークルの宇宙開発チーム「NAFT (ナフト)」代表桑村航矢さん本学学生	3.13 (金)	中日 (朝刊)
91 七原優介さん教育学部4年生がトヨタ自動車株式会社野球部のキャンプに参加し野球漬けの日々で猛勉強	3.13 (金)	中日スポーツ
92 ニュースな科学：大学と企業 橋渡ししガに 赤崎 勇本学特別教授、天野 浩工学研究科教授のノーベル物理学賞受賞式の写真が取り上げられる	3.13 (金)	日経 (朝刊)
93 日本学士院賞：東京大学教授近藤 豊氏元太陽地球環境研究所教授	3.13 (金)	読売 他4社
94 2015年 第62回応用物理学会春季学術講演会開催：3月13日 赤崎 勇本学特別教授、天野 浩工学研究科教授、カリフォルニア大学サンタバーバラ校教授中村修二氏が講演し、ノーベル賞授賞式後国内で初めて3氏揃っての登壇となった	3.14 (土)	中日 (朝刊) 他2社
95 教育講演会「一人ひとりの子どもが大切にされる教育とは」～少人数学級を全学年に～開催：22日 中嶋哲彦教育発達科学研究科教授が講演	3.14 (土)	朝日 (朝刊)

## イベントカレンダー

開催月日・場所・問い合わせ先等	内容	
<b>2月13日(金)～5月29日(金)</b> 場 所：附属図書館医学部分館 2階入口ホール 時 間：9:00～20:00 (平日) (3/23～31は9:00～17:00)、 13:00～17:00 (土曜日) 休 館 日：日・祝日 入 場 料：無料 [問い合わせ先] 附属図書館医学部分館 052-744-2505	<b>附属図書館医学部分館ミニ展示会</b> <b>「建物に見る病院と医学校の歴史」</b> 内 容：広く日本と西洋における病院と医学校の歴史を建物から振り返り、絵画、図面、写真等、医学部史料室に所蔵する史料を展示公開する	
<b>2月17日(火)～5月9日(土)</b> 場 所：博物館2階展示室 時 間：10:00～16:00 休 館 日：日・月曜日 入 場 料：無料 [問い合わせ先] 博物館事務室 052-789-5767	<b>第30回博物館企画展「めだかの学校</b> <b>ーメダカ先生(山本時男)と名古屋大学のメダカ研究ー</b> [関連特別講演会] 4月25日(土) 場 所：博物館3階講義室 時 間：13:30～15:00 講演題目：「山本時男先生の思い出とメダカ研究」 講 演 者：鬼武一夫氏 (東北文教大学長) 参 加 費：無料	
<b>3月4日(水)～4月25日(土)</b> 場 所：減災館 時 間：13:00～16:00 休 館 日：日・月・祝日、第2第4火曜日 入 場 料：無料 [問い合わせ先] 減災連携研究センター 052-789-3468	<b>減災館第6回特別企画展</b> <b>「東日本大震災とライフライン復旧・復興の取り組み」</b>	

## イベントカレンダー

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

**4月1日(水)～6月25日(木)**

場 所：博物館野外観察セミナーハウス  
2階

時 間：10:00～16:00

休 館 日：土・日・祝日

入 場 料：無料

**博物館野外観察園セミナーハウスサテライト展示  
「名大の野鳥」**



[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

**4月3日(金)～27日(月)**

場 所：中央図書館2階ビブリオサロン

時 間：8:00～21:30 (平日)、

8:45～21:30 (土・日曜)

対 象：一般

入 場 料：無料

**附属図書館新入生歓迎展示会  
「知の森へようこそ2015」**

内 容：本学の知的活動の一端に触れるものとしてノーベル賞受賞者  
5名の博士論文を貴重資料の中から新入生に親しみやすいもの  
を展示



[問い合わせ先]

附属図書館 052-789-3678

**4月21日(火)**

場 所：減災館1階減災ホール

時 間：18:00～19:30

定 員：100名

対 象：一般

参 加 費：無料

**第109回防災アカデミー**

講 演 者：金箱温春氏 (金箱構造設計事務所代表取締役)

[問い合わせ先]

減災連携研究センター 052-789-3468

**5月9日(土)、5月16日(土)、  
5月23日(土)、6月13日(土)**

場 所：博物館3階講義室

時 間：10:30～12:00

定 員：80名

参 加 費：無料

対 象：一般

(基本的に毎回参加できる方)

**名古屋市生涯学習推進センター大学連携キャンパス講座  
「達人(研究者)と話そうー祝・ノーベル賞受賞」**

講演題目：「鉱物(天然の結晶)と岩石」(5/9)

講 演 者：足立 守 (PhD 登龍門推進室特任教授)

講演題目：「トランジスタと青色LEDの誕生」(5/16)

講 演 者：澤木宣彦 (本学名誉教授)

講演題目：「青色LEDの意義と未来」(5/23)

講 演 者：竹田美和 (本学名誉教授)

講演題目：「人工結晶とLED」(6/13)

講 演 者：水谷宇一郎 (本学名誉教授)



[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

名大トピックス No.263 平成27年4月15日発行

編集・発行/名古屋大学総務部広報渉外課

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報渉外課にお寄せください。

名古屋市千種区不老町 (〒464-8601)

TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail kouho@adm.nagoya-u.ac.jp

表紙

入学祭典での発表の様子

(奇術研究会)

(平成27年4月5日)



名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ

(<http://www.nagoya-u.ac.jp/extra/topics/>) でもご覧いただけます。

## 156 名古屋大学と空襲② — 大幸キャンパス —

現在の大幸キャンパスが名大の所管となったのは1975（昭和50）年のことです。したがって当時の名帝大が空襲に遭ったわけではありませんが、ここはアメリカ軍による集中的な空爆が行われた地域でした。

当時の愛知県尾張地方は、航空機（軍用機）の一大生産地帯になっており、その中心である名古屋を代表する航空機製造企業が三菱重工でした。その三菱重工が、1938年7月に航空機の発動機（エンジン）専門部門として東区大幸町に設立したのが、名古屋発動機製作所です。その後の拡張により、1944年4月現在で、約96万m<sup>2</sup>の敷地に約37万m<sup>2</sup>の建物が建ち、発動機を月に1,500台生産することができました。

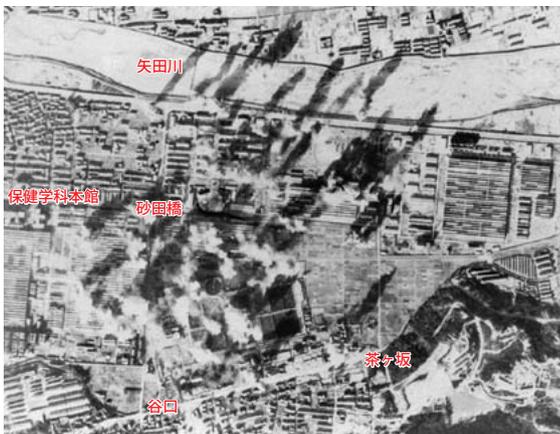
現在の大幸キャンパスはその西部の一角にあたり、名古屋発動機製作所本館などがあった区域でした。

アメリカ軍が日本本土を空爆するにあたって、最初の標的とした施設の1つが、三菱重工の航空機工場でした。

1944年12月13日13時57分、B29爆撃機71機が名古屋発動機製作所上空に来襲、8,000mを超える高高度から、186tもの爆弾・焼夷弾を約1時間40分にわたって投下しました。これにより工場は、2割近くの建物を破壊され、223名の死者を出しました。これが名古屋への本格的な空襲の始まりでもありました。

その後、三菱重工の他の工場も激しい空襲に遭いますが、大幸への攻撃は執拗で、12月22日、翌年1月23日、2月15日にも空襲の被害をうけました。市街地への無差別爆撃が開始されたあとも標的にされ続け、4月7日にはB29爆撃機151機が来襲、約2時間にわたる猛爆撃を加え、ついに工場は壊滅しました。

戦後、この工場跡地の一角を、愛知教育大学名古屋分校が利用しました。そして1970年に同大学が刈谷市に統合移転すると、医学部附属病院分院の狭隘化に悩んでいた名大が、その跡地の一部を利用したのです。



- |   |   |   |
|---|---|---|
| 2 | 1 | 1 |
| 3 | 4 | 2 |
- 赤く囲ったのが、三菱重工名古屋発動機製作所の敷地と思われる区域。©2015Google ー地図データ ©2015ZENRIN
  - 空襲をうける三菱重工名古屋発動機製作所（1945年4月7日、写真：米軍）。この空襲では302名の死者が出た。
  - 愛知教育大学名古屋分校校舎（『愛知教育大学史』より）。空襲をうけた名古屋発動機製作所本館を改修して利用した。名大移管後も医療技術短期大学部本館、次いで医学部保健学科本館として、2008年に建て替え工事が完了するまで使われ続けた。
  - 現在の大幸キャンパス。一般道路側の一角（医学部保健学科旧本館）は、改修のうえかつての本館の形状を残している。